絆でなんでもふきとばせ

暁ノ星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絆でなんでもふきとばせ

【Ｎコード】

Ｎ４４７３Ｖ

【作者名】

暁ノ星

【あらすじ】

中二病を患った絆厨の不動遊星を筆頭に、なんでもかんでも絆でふきとばしていくハートフルボッコハイテンションギャグカオススラブロマンス学園物語。蟹：「僕は死にましぇん！積んでいるエ〇ゲーがあるから！」注意事項　蟹：「おい、デュエルさせろよ」うｐ主：「リアルファイトしかしないよ」デュエルはしません。

第１話　絆を紡ぎし者　不動遊星（前書き）

二次創作初の暁ノ星です。
↓ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ８２４５ｕ／
の方途同時に更新していくので、両方友よろしくお願いします。

第1話　絆を紡ぎし者　不動遊星

「オオオォ～オオオォ～絡みつくヒロイン振り切って～限界まで吹っ飛ばして～嫁の思い繋いだら行くのさｍｙｌｏｖｅ」

気持ち悪い替え歌を歌いながら、赤を基調としたバイク『遊星号』で1年以上走り続ける通学路を、エ〇ゲーのしすぎて完徹してしまった、蟹頭の不動遊星は走る。

いや～まさかリトバスがあんなに面白いとは・・・・・あれをやらない人は人生の８０％は損しているな。

とても馬鹿なことを考えながら、眠気と言う強敵に負けそうになりながら、バイクで走っていると目の前に人が居ることに気づいた。

速度を上げて・・・・・

「て！僕を轢き殺す気か！」

後ろからやって来る暴走バイクを避け、リオン・マグナスは逃げようとする遊星を捕まえる。

「いや～リオン、つい☆ね」

「何がつい☆ね、だ！完全に故意で僕を轢こうとしただろ！」

「お前たち、何通学路の真ん中で口論をしてやがる」

二人を見て、溜息を吐きながら身長１９５ｃｍもある大男、空条承

太郎は時計を見て、

「早く学校に行かないと遅刻するぞ。ハンバーガーの具材にはなりたくないだろ」

遊星達の通う『紳士高等学校』には、ドナルド・マクドナルドと言う道化師の様な格好をした音楽の教師が居るのだが、

遅刻した生徒が出ると居なくなり、気づいたら食堂から服に赤い紅いケチャップ（ドナルド談）を付けてよく出てくるのだが、その日に食堂ではハンバーガーが売られ、遅刻した生徒が行方不明になると言う七不思議がある。

「ふん！七不思議など馬鹿馬鹿しい！」

「おいリオン～生まれたての羊みたいに足が震えてるぞ～」

その後。遊星のバイクに無理矢理三人乗り、なんとか遅刻を回避することが出来たが、校門を通る時、ドナルド先生が舌打ちした気がするけど、別にそんなことは無いと三人は心の底から信じたい。

「おい～っす」

「うはぁｗｗｗｗ遊星ｗｗｗｗｗおはようｗｗｗｗｗ」

少し背筋が凍る体験を得て、何とか教室にたどり着いた三人へと異常にテンションの高い内藤がやって来る。

「俺たち男は黙って！」

「巨乳だｗｗｗｗｗ」

「本当にお前らは・・・・・・やれやれだぜ」

肩を抱き合いながら、遊星と内藤が笑い合っているのを見て承太郎はまた深い溜息を吐く。

「溜息ばかり吐いてないで、出すもの出しただろうだ？」

「んふ、承太郎君、おはようございます」

周りに薔薇が見える二人、イケメンの古泉一樹。青いつなぎの良い男♂阿部高和が現れて、承太郎の背筋にまた冷たいものが走る。

だが、これは恐怖と共に、嫌悪感が、

「俺はノンケだ・・・・・だから前みたいに間違えで！俺の処女を奪おうとしないでくれよ！」

２週間前。体育の授業の為、承太郎は体操服へと着替えている途中古泉と阿部の類い稀たコンビネーションアタックに、処女を奪われそうになった。

だが承太郎は伊達に１９５ｃｍの大男では無い。なんとか逃げ出すことができた。

承太郎の心に恐怖心が植え付けられた瞬間。

「それは残念だ。お前の穴の締りはよさそうなんだがな」

「んふ、残念です」

本当に、こいらに後ろを見せたら最後な気がしてきた・・・・・・

承太郎がまた溜息吐いていると、教室の勢い良くドアを開け、

「はぁ・・・・はぁ・・・・遅刻するかとうわぁ！」

ドアの近くにいた承太郎を見て、まるで猫に襲われそうになった鼠の様に、秋山澪は威圧感の塊の承太郎怯える。

少し・・・・心が傷つくな・・・・・・

「ひぃい・・・・・・！」

「澪！大丈夫だから！承太郎君は少し顔が怖いだけだから、ね」

「うううぅぅ・・・・・・」

親友の平沢結に連れられ、涙目の澪はついて行く。

・・・・・泣いてもいいかな？

「ククククク！」

「リオン、笑うな・・・・」

ちぃ、目から汗が流れやがる・・・・

お前ら二人も、周りに薔薇を散らしながら近づいてくるな！

「流石怖面承太郎ｗｗｗｗｗ」

「内藤さん、人を笑っているところすみませんが」

何時も絶やすことの無い笑を浮かべる内藤の首筋に、冷たい刃を当て、日本刀を二本帯刀する魂魄妖夢は射抜くかの様に内藤を睨む。

うはぁｗｗｗｗｗあまりにもの怖さで失禁しそうｗｗｗ

「やあ妖夢たんｗｗｗ首筋に当たってるその刀を遠ざけれくれないかなｗｗｗｗ俺失禁しそうｗｗｗ」

「惚けないでください！私の体操服を盗んだのは貴方でしょ！」

食い込んでる食い込んでるｗｗｗｗｗ！軽く薄皮切れました！ｗｗｗｗｗ

てかｗｗｗｗ一早く俺が疑われてるｗｗｗｗｗｗｗｗ俺って妖夢たんに思われてるんだなｗｗｗｗｗ！

「なあ内藤。妖夢の体操服はどんな香りがした？」

「それはストロベリーな香りがしたぜｗｗｗｗｗｗあっ・・・・・・」

遊星の言葉に、笑を浮かべながら内藤はポロッと　言ってはいけないことを喋ってしまった。

もう一本の刀を抜き、妖夢は怒りの炎を纏う。

内藤・・・・ご愁傷さま。

「遺言は、要りませんよね」

妖夢の二本の刀からなる嵐の様な連撃。空を舞う内藤。

血の海に、幸せな笑を浮かべ内藤は沈む。その男気に遊星は敬礼する。漢と書いて男。

内藤。本当に自分に忠実に生きてるぜ！

「お～いホームルーム始めるぞ～」

迷彩服を見に纏う、遊星の教室の担任ソリッド・スネークはタバコを銜えながら教室に入ってきた。

血の海に沈む内藤。まぁ何時も通りの光景だな。

・・・・・本当にこのクラスの担任になったことを後悔するぞ・・・・・・

その後。2時間目に内藤は復活し、遊星とスカートとニーソの黄金比について語り合い、リオンがそれにツッコミ、刀を抜き肉体に妖夢はツッコミ、承太郎が溜息を吐く。澪が承太郎の行動一つ一つに怖がり、唯がそれを見て笑う。小泉は阿部と薔薇を撒き散らしながら男の世界に。

スネークは胃を抑える。

放課後になり、内藤は水泳部の女子更衣室を覗きに行くと、遺言を述べてカッコよく旅たち、澪と唯は軽音部、妖夢は剣道部。古泉は何か考えがあると職員室へ。安倍はノンケを探しに公園の男子トイレに。

曇り空の下。部活動にも入っていない遊星とリオン、そして承太郎の3人は帰路の途中、

「遊星、今日もお前の両親は研究所で仕事をしているのか？」

「いや。研究も一段落したらしくて、当分の間は家に居るぜ」

「確か・・・・人間の進化の象徴。モーメントだったか。まあ難しいことはよく分からないがな」

そうだった。今日は父さんと母さんが久しぶりに家に帰ってくるんだったな。

今日ぐらいは、寄り道もせずに帰るか。

「それじゃあ～俺の家はこっちだから」

二人と別れ、等々雨も振り出し、『遊星号』に乗り早く家に帰ろうと走ろうとすると、

目の前に傘も差さず雨に濡れる、紳士高校の制服を着た少女がいた。

どうしたんだろあの女の子は？傘も差さずに。風引くぞ。まあ俺は、顔も心もイケメンだから？濡れている女子は見捨てられないな（キリッ

「へい！そこの彼女！雨に濡れると風引くぜ！俺の後ろに乗りな！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

無視ですか～心にダイレクトアタックを受けてしまったぜ・・・・・・・・

段々雨が強くなるが、それでも少女雨空を見つめる。

流石に、これ以上雨に濡れ続けたら風引くだろ。

「おい、これ以上雨に濡れてたら風引くだろ。お前の家まで送ってやるよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

遊星は少女の手を引き、『遊星号』の後ろに乗せヘルメットを渡す。

何故だから少女はヘルメットを物珍しそうに触っている。

この女の子の手、異様に冷たかったな。それに何故だか・・・この子、本当に人間なのか？

だが少女は一言も離さず、『遊星号』をペタペタと触っている。

このまま雨に濡れても仕方無いよな。

「とにかく、俺の家に行くけど・・・・君の名前は？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

うっ・・・・・名前まで教えてくれないのか・・・・・・・・

「・・・・・・・・名前、貴方が付けて」

「えっ？俺が！？」

誰がこんな展開を考えた。まさか、女の子の名前を考えないといけない日が来るとは。

でも、そうなると以外と難しいものだな・・・・・・そういや、この前エ〇ゲーで雪が出てきたな。雪だと安直な気がするし、ここは有希にして・・・・おっ、あそこの表札「長門」と書いてるな。よし！

「なら、君の名前は長門有希だ」

「長門・・・・・有希・・・・・・」

『遊星号』の後ろに表情を変えない少女を乗せ、遊星が力強く考えた名前を言う。

これは絆の力で大切なものを守る物語。

第2話　流星と明希

「んふ、それじゃあスネーク先生。あれを実行させていただきますよ」

「・・・・・もう勝手にしてくれ」

小瓶の胃薬を片手に、タバコを吸い立ち去っていく問題児を見送っていく。

うぅ・・・・・胃がキリキリする・・・・・・・

「大丈夫ですかスネーク先生？顔色、悪いですよ？何か薬でも処方しましょうか？」

保健医の八意永琳は、浴びるように胃薬を飲むスネークを心配しそう言うと、灰皿にタバコを押しつけ、

「ありがとう八意先生。でも俺にはタバコがあるから大丈夫だ」

「もう、学校内は禁煙ですよ」

「ククククク・・・・！そんなことは言わないでくれ。俺の命の源なんだから」

「フフフフフフ、面白い人ですね。でもタバコは体に毒ですから止めたほうが良いですよ。

愛用しているラッキーストライカーの入った箱を揺らしながら、ス

ネークは苦笑いする。

流石医者だな。耳が痛い・・・・・

まあ止めろと言われて簡単に止められないけど。

「善処する。それでは俺は問題児がこれ以上大きな問題を起こさない様に見張ってくる」

これ以上、八意先生といるとタバコについて以外にも色々と言われそうだしな。善意で言ってくれるのは有難いんだが、

今はこのままで良い。最悪なクラスの担当になったけど、先生だって好きでやってるんだしな。

だけど・・・・・・タバコ、少し控えるか。

「流石スネーク先生！生徒思いです！」

職員室を出ていったスネークを見届け、永琳は体をクネクネと動かしながらそう言う。

紳士高等学校に赴任してから、ところ構わずタバコを吸うスネークを八意は最初は嫌っていた。

受動喫煙やによる生徒への健康を害する可能性。タバコを吸っている姿を見て、タバコを吸をうと考える生徒が出ると考えていたから。

でも、スネークがところ構わずタバコを吸っていると思ったら、生徒に副流煙を吸わせないように換気されている室内で、生徒が吸わ

ない様に離れて吸い、

生徒の前ではタバコを吸うたびに「不味い」「タバコを吸ったら人間終わりだ」と実態験を見せて生徒たちにタバコの恐ろしさを教えている。

・・・・と永琳は勝手に思っているが、別にスネークはそこまで考えて行動している分けが無い。

堂々と生徒の目の前で、換気されていない部屋で吸い。「タバコを吸わないと俺は死ぬ」と何時も言っている。

スネーク先生は今、彼女とか居るのかな・・・・？って！私は何考えているのよ！

でも・・・・居無いならチャンスよね！

先生と私が・・・・・・

「ウフフフフフ・・・・・・！」

「先生～ｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ女子更衣室を覗いたらｗｗｗｗｗｗ妖夢たんに脳天を斬られたので手術して欲しいんですけどｗｗｗｗｗｗｗ」

「ヌフフフフフフフフ！」

自分の世界に沈み永琳に、内藤の言葉など届く分けも無く職員室に血の海を作り、沈んだ。

大雨の中、遊星は長門を後ろに乗せやっと自宅に着くことが出来た。
帰路の途中、長門は一言も喋ることは無く異様な気まずさに遊星は少し疲れ
マインドが少しブレイクしかけていた。
あれだな。どれだけ自分が話を振っても無視されるのは本当に堪える・・・・・心をバッキバキに折られたぜ・・・・・・
車庫に『遊星号』を入れ、雨で張り付く服に嫌悪感を感じながら、また立ち尽くす長門の手を引き自宅のドアを開ける。
そういや、父さんと母さんとは1ヶ月ぶりだな。
「ただいま～」
「ざっ！ちぇりお～！」
「うおっ！？」
ドアを開けると、突然風を切る音と共に鋭い突きが遊星の頬を掠める。掠めた頬から血が流れる。
凄い突きだ。これなら熊も一撃で沈むぞ！
「父さん！久しぶりの再開に息子に突きを放つなよ！」
「いや～久しぶりだな、遊星。実はな、この前オーガと呼ばれる男と地下闘技場で拳を交えてから血が激っ・・・・て？遊星、後ろの

可愛い女の子は誰だ？」

自宅でも白衣姿の、不動流星はまだ構えを解かずに遊星を見据える。

やっと気づいてくれたか。

確か、オーガって史上最強とか言われてなかったか？段々父さんが人間離れしてきたな・・・・・

「帰りの途中に、傘も差さずに雨に濡れてたから・・・・まあ色々とあって家に連れてきたんだってうおっ！」

目の前で手を交差し、空間を破壊しながら進む遊星の流星の拳を受け止める。受け止めた腕が麻痺する。

父さん！本当に研究してるのなんだよ！人体実験で人間やめたのか！？

「お前！濡れそぼった可愛い子ちゃんを連れてくるとか！君はいつから僕よりダディクールな男になった！」

「本当に面倒くさいな！父さんは！母さん助けて！！父さんが俺の目を精確に突いてくる！」

明らかに獲物を狩る目をした流星は、遊星の目へと刈るように拳を繰り出す。玄関での攻防。

それに終止符を打ったのは、遊星の母親だった。

「不動さ～ん・・・一体玄関前で何をやってるんですか・・・・・

？」

「ビクッ！」

背筋も凍る殺気。家の中に冷たいものが包み込む。

遊星の青ざめた顔。エプロン姿の不動明希が、笑を浮かべながらやって来た。

「遊星、お帰りなさい。もう直ぐご飯が出来るからビショビショですし、早くお風呂に入りなさい・・・・流星さん、少しお話があるんですけど」

「助けて遊星！今日が僕の命日になる！」

ハンカチを片手に、ホロホロと涙を流しながら連れさらわれていく流星を見送る。

さらば父さん！短い人生でしたね。

「あら？遊星、その子どうしたの？貴方同様ビショビショじゃない！？」

「母上殿。いつ気がつくのかドキドキしてました」

「・・・・・・・・・・・・」

この殺伐とした光景を見てもリアクション無し。長門さんは凄い人だな。スルースキルが高いのか？

「あら～遊星にも春が来たのかしら？」

「ふふふ～これで俺もリア充の仲間入りかな？」

「・・・・・・・・・・・・」

・・・・うわぁ～これをスルーされるのは本当に俺が痛痛しい人みたいになってる～

落ち着け俺。偉い人は素数を数えろと言いました。

「まあ詳しいことは後でいいから、えっと・・・・貴方のお名前は？」

「・・・・・長門・・・・・・・・有希・・・・・・・・・・・」

他の人に俺が考えた名前を言うとは。本名を言ったらいいじゃないか。

まさか！俺の考えた名前を気に入ってくれたのか？ふっ、流石俺のネーミングセンスはピカイチだ。

やっぱり？俺の才能は太平洋を行き渡るな（キリッ

「このままじゃ風邪引いちゃうわよ？お風呂に入りましょう。遊星は濡れた服を脱いでなさい。流星さんは・・・・・後で、ね」

「はいいいぃぃ！」

「父さん、今日を命日にしたく無かったら地の果てまで逃げなよ」

「自家用ジェット機があっても逃げれる気がしない」

「ですよね～」

もはや、流れに身を任せる長門を連れていく明希。青い顔をして立ち尽くす流星。

手を合わせてご冥福をいのる遊星。

濡れて体に張り付く服を脱ぎ、タオルで自慢の蟹頭を拭く。

長門って、なんだか不思議な奴だな。なんか・・・・人間ってよりも妖精？生きる世界が違うと言うか・・・・・・

それにあいつは、『遊星号』やヘルメットも不思議がってたし、

まさか別の世界からやってきた王女様とか？

それはエ〇ゲ脳って言うのか！アハハハハハ！！

「どうした遊星？一人でニタニタ笑って？」

「父さん、その知的に満ち溢れた新聞紙の下に隠された大人の本は何？」

「坊やには真似出来ない高度なテクニックさ」

本当に父さんはどんな研究をしてるんだろうか？

「前から聞こうと思ってたんだけどさ、なんでこんな変態野郎と母さんは結婚したんだろうな」

「・・・・僕もそれが分からないんだ」

それでいいのか！

きっと俺の遺伝子の１０割方が父さんの遺伝子だろうな。確実に。

「それよりも、あの長門と言う子。なんだか不思議な子だな」

「実は、長門有希って名前も本名じゃ無いんだ」

「僕の息子はミステリアスな人が好みだったのか」

父親に俺の好みを勝手に決めつけられた気がするけど、俺は気にしない。

だって、新聞紙に川原によく落ちてるパンドラブックを挟んでる人だし。

・・・・・それに、

「流星さん・・・・・・その新聞紙に挟んでいるものは何ですか？」

「ハッ・・・・・・・！」

殺意の波動を放ちながら、風呂に入り体の温まった、明希の服を着ている長門と、

黒い殺気を放つ明希が、ニコヤカな笑を浮かべながら流星を見ている。流星の全身が蒼くなっていき、遊星は冷や汗を掻きながら風呂場へと逃げていった。

・・・・・なんだか後ろから子羊の様な悲鳴が聞こえたけどさ。別にモーマンタイ。

第2話　流星と明希（後書き）

スネークが愛用している「ラッキーストライカー」は、実際に原作の方でもスネークは愛用していますが、三次元では実在しないタバコです。

遊星の両親の下の名前や細かい設定が公式で無かったので、自分で考えました。

父　不動流星

母　不動明希

感想は、書く原動力になりますのでお待ちしております！

第3話　ようこそ長門　忍び寄る白き最強（前書き）

この頃鼻の左の方からよく鼻血が出ます。
とても関係ないですね。
別小説の話なのですが、こっちの小説の投稿が落ち着くまでは、こっち中心でやりたいと思います。

２日でアクセス４６０だってさ、この小説を読んでいただきありがとうございますｏｒｚ
鼻血を出しながら妄想を膨らまして頑張ります。

第3話　ようこそ長門　忍び寄る白き最強

「それでさ～澪ちゃんたら承太郎君に怯えてるんだもの！大笑いしそうになったよ！」

2年生が4人、1年生が1人の軽音部は、テーブルを囲んで部員の琴吹紬が持参してきたケーキを食べながら、これが部活動か目を疑いたくなる光景が広がっていた。

「本当に澪は怖がりだな～クラスは違うけど、承太郎なら知ってるぞ」

「私も、人間離れした体格で、いつも帽子を被ってますよね」

「そう言えば、同級生でも噂になってますよ。昔は暴れてよく喧嘩ばかりして・・・・・そうそう、1年の時に教師を殴ったってのも聞きました」

「ビクゥ！」

部員の紬、田井中律、中野梓の話を聞いて澪は体を強張らせる。

1年の頃はクラスは違い、2年に上がり承太郎と同じクラスになった。

初めてクラスで見たとき、ふと長身の承太郎の方を向くと、あの鋭い眼差しで睨まれ、その場で動けなくなったのが印象に残っている。

うううぅ・・・・今でもあの日がトラウマになって空条君が怖い・・・

・・

「そうかな？私は承太郎君はそんなに悪い人だと思わないけどな～」

「私はあの悪人面だと・・・・1人、いや2人は確実に・・・・・・」

「へへへへへ変なこと言わないでよ！」

「へクション・・・・・！ズズ・・・誰だ？俺の噂をしている奴は？」

「承太郎～醤油が切れてるから買ってきてくれ～」

「やれやれだぜ・・・・分かったＤＩＯ」

溜息を吐き、雨の止んだ夕暮れへと承太郎は歩いていく。

小銭入れを片手に。

体を温め、遊星は風呂から上がりリビングへと向かうと、そこでまるで猟奇殺人の現場の様に悲惨な部屋になって、口の中から魂が飛んでいく流星がいた

俺の周りには、血の海を作るのが得意なのが多いな。

今日、放課後に遺言を遺して旅立った仲間を思い出し、少し目に熱いものが込み上げてくる。

目から流れそうになる汗を抑え、時計を見ると夕方を超えて夜の領

域になっていた。

明希は赤く染まったエプロンを外し、血の海に倒れる流星を、興味深そうに眺めている長門に、

「長門さん。そろそろお家に帰らなくて大丈夫？帰るなら遊星にバイクで送らせるわよ」

確かに、こんな夜遅くに初めて出会った男女が一つ屋根の下に居るのは色々と駄目だよな。

まあ母さんの言うとおり、バイクで家まで送ってやるけど、

また気まずい静寂ゾーンに入るのか・・・・・・・

「私に、帰る場所は・・・・・・・無い」

帰る場所は無い？電波でも受信したのか？それとも・・・・まじで妖精さんなの！？

俺に攻略出来ない者は無い！ただし二次元に限る！

「・・・・・そう。なら帰る場所が見つかるまでお姉さん達と一緒に暮らしませんか？」

「お姉さん・・・ぷっ・・・・・！」

ドグシャア！と物凄い破壊音が流星の倒れる方で鳴り響き、遊星は本日何度目かのご冥福をお祈りした。

「・・・・・・・迷惑にならない？」

「フフフフ、子供がそんなこと気にしないの。それに女の子の子供が欲しかったから大歓迎よ！」

母さん・・・・・！

とても良いワンシーンのところすみませんが、その頬に付着しております返り血をお拭きになられたらいかかでしょうか？

後、父さん。

顔面が凹な状態になってますけど生きていま・・・・せんよね。

「長門、よろしくな」

「・・・・・・・・よろしく」

兎に角。長門が俺たちの家で暮らすのは俺も大歓迎だ。

「それじゃあご飯にしましょう！遊星、テーブルにお皿を並べて」

「イェッサー！」

「私も、手伝う」

遊星と長門は、明希の手伝いをしている間に流星も凹んだ顔も元通りなり、まだ鼻から流れる血を手で受け止めながら洗面所へと覚束ない足取りで向かう。

・・・・・リビングの掃除もしないとな。

キッチンのテーブルに、明希の作った料理を並べ、貧血気味の青い顔をした流星もなんとか生還し、全員でテーブルを囲み椅子に座る。

「それじゃあ皆さん」

「いただきます！！！」

「・・・・・いただきます」

「おっ、今日は肉じゃがと焼き魚か。久しぶりの明希のご飯だし早く胃袋に詰め込まないとな！ハムハムハム」

「もう、流星さんったら」

子供の様に目を輝かせながら流星は全ての料理を流し込むように食べ、それを見た明希が微笑む。

1ヶ月ぶりの家族全員の食事だったな。俺も母さんの手料理は久しぶりだ。

「モゴモゴ・・・んぐ・・・・・今更聞くんだけど、長門君は遊星と同じ学校に通っているのかい？制服が『紳士高等学校』だしね」

俺もそれは気になっていた。

確か内藤の全学年組別選りすぐりの女子写真集に長門は載ってなかった。変に恥ずかしいけど、長門も美人だぞ俺は思う。内藤みたいにランク付けるとＡ＋じゃないか。

まさか内藤が撮り損ねる分けがない。あいつは3次元と2次元の女の子の為に生きる猛者だ。

「・・・・・学校には通ってない・・・・・・・」

「・・・・・・・ＨＡＨＡＨＡＨＡ！！変なことを聞いてしまったね！長門君！長門君は今日から僕のことを父さん、もしくはパパかご主人様かマイダーリンでもぐぼぉ！」

「あらあら大変。私の拳が流星さんの脇腹を骨を折る勢いで殴っちゃったわ～」

「ごふぅ・・・・・流石明希・・・・・・・・その拳があれば世界を狙えるぜ・・・・・・・」

「父さん、自分の欲望に忠実なのはいいけどさ、命は投げ捨てるものじゃないよ？」

「遊星・・・・覚えておいてくれ、この世に命を顧みずに欲望に忠実に生きた男がいたことを・・・・・・」

「・・・・・・・・フフ・・・・・・」

流星と明希のコントの様な光景を見て、長門が今日、微かだが笑みを浮かべた。

長門の笑みに、遊星たちも微笑む。

不思議な出会いから、まさか一緒に暮らすことになるとはあの時は

思わなかった。けど、なんだか長門が笑ってくれた時、
俺はとても嬉しかった。

「ング・・・ング・・・はぁ・・・・・」

異様に真っ白な体、髪の毛。背筋が凍るような赤い瞳の男。
男は飲み干した缶コーヒーを握りつぶし、放り投げ、夜空を見上げる。
天高く上に男は居た。そして天高く上にある世界、その頂点に君臨する『神』の指令を受け地上に降り立った。

「ン？雨が降ってきやがったか・・・・」

一時止んでいた雨が、また空から降り注ぎ、男は気怠そうに夜道を歩く。
不思議なことに、少年は傘も差さずに雨の中濡れることはなかった。
『雨が男に当たる前に、まるで見えない壁に反射され、弾かれる』

「チィ、逃げ惑うせいで探すの少し時間が掛かっちまったなァ」

ある家の前で止まり、血の様に紅い目でその家の表札を見る。
不動

「見ぃつけたァ〜」

男は、悪魔の様な笑みを浮かべた。

第４話　遅刻際の友情

「それで！内藤さんは私の体操服を盗んだけでは飽き足らず、水泳部の女子更衣室を覗こうとしたんですよ！」

箸を片手に、妖夢は祖父の魂魄妖忌に学校での内藤の変態行動を言う。

妖忌は毎晩、妖夢が愚痴を言うように内藤と呼ばれる男の話を聞いている。白い豊かな髭を摩り、

「ホッホッホッ！毎日内藤君とやらの話を聞いていると、内藤君はとても漢と書いて男の行動をしているな」

「モグ・・モグ・・・ンッ、どこがですか！人間として駄目な行動しかしいませんよ！」

白米を飲み込み、妖忌の言葉を否定する。

どこが漢と書いて男の行動ですか！人間として駄目じゃないですか！

「それにしても、妖夢は明るくなったの」

「明るくなったって？まるで前は根暗だって言いたいんですか？」

「そうじゃ」

「・・・・・・・・・・・」

自分でも自覚はあった。

昔からお爺様の指導の元、剣の鍛錬を積み続け、幼稚園、小学校、中学校も友達を作らず剣に明け暮れ、

周りは自分を奇異な目で見る。

女が剣の鍛錬をして何が悪い。

・・・・・・けど、小さい頃から内藤さんだけは違ったな。

「妖夢たんｗｗｗｗ俺にも剣の修行教えてくれよｗｗｗｗｗ」

忘れもしない、まだ幼稚園に通っていた時の出来事。一人空き地でお爺様から貰った刀身の短い竹刀を振っていると、眩しい程の笑顔を浮かべて内藤さんがやってきた。

「えっ・・・・・・・」

祖父以外にあまり話したことは無く、私が戸惑っていると内藤さんは適当に落ちていた木の枝を拾い上げ、

「いくぜｗｗｗｗ牙突零式ｗｗｗｗｗｗ！」

聞いたことも無い技名を叫び、奇妙な腰の回転をしながら木の枝を突いてくる。

私は突然の出来事に、一瞬何が起こったか分からなかったけど、そこは毎日の剣の鍛錬が生き、すぐに竹刀で木の枝を払い内藤の脳天

に竹刀を降るう。

「あだっｗｗｗｗｗｗｗ！」

綺麗に内藤の頭に竹刀の一振りが決まり、また笑いながら内藤は頭を押さえる。

あっ！つい本気で頭に竹刀を・・・・・

「いや～ｗｗｗｗｗ流石妖夢たんｗｗｗｗｗｗｗ！カッコイイ～ｗｗｗｗｗｗｗｗｗもう惚れちゃいそうｗｗｗｗｗｗ」

「ふぇ・・・・？カッコイイ・・・・・」

周りは、女の子が剣を振るうなど可笑しい。危ない。他の人と違う。でも、内藤さんはカッコイイと言ってくれた。私が剣の鍛錬を積んでいても凄いと言ってくれた。

あれから内藤さんは孤立している私によく話しかけれくれ、高校に進学する頃には私にも友達が出来、

人生で一番楽しい時を過ごせている。きっと内藤さんがあの時私にカッコイイと言ってくれたから。

「しかし、毎日内藤君の話をしているのは・・・妖夢は内藤君のことが好きなのか？」

「んぐぅ・・・・・！」

妖忌の不意打ちに、口の中のものを吐き出しそうになり、咳が出る。

「コホッ・・・・・お爺様！何言ってるんですか！何故私が内藤さんのことが好きだってことになるんです！」

「そんな必死になって否定するとは、お爺ちゃんは応援してるぞ」

「ちぃ～がぁ～いぃ～まぁ～す！」

白玉楼に妖夢の怒る声が鳴り響く。

「くっそ～一足遅かったか！ルパンめまんまと盗みおって！」

「いいえ、あの方は何も盗らなかったわ。私の為に戦ってくださったんです」

「いや！奴はとんでもないものを盗んでいきました」

「貴方の印鑑と通帳とクレジットカードとへそくりと土地の権利書と車と・・・・・・・」

「めちゃくちゃ盗んでるじゃないかあああああぁぁ！」

布団を吹き飛ばし、某有名刑事の台詞に怒り遊星は大声で叫ぶ。

気づいたら時計は早く準備しないと学校に遅れる良い時間を表示し、何故自分が怒りながら起床したのかを忘れ、鞄を片手に早々と階段を降りる。

慌ててキッチンへと向かうと、遊星以外全員が着いていた。

「・・・・・・おはよう・・・・・・・・・」

「ああ！長門おはよう！母さん時間がないから食パン一枚貰っていくぞ！」

「遊星よ、もっとゆとりを持って朝を迎えないか？」

「あら、昔は万年遅刻の称号手に入れた人の台詞とは思えないわ」

「あれは教師たちが僕を陥れようと目覚まし時計を破壊して・・・・・」

「いてきま～す！」

食パンを齧りながら、『遊星号』に乗り急いで発信する。

残り時間９分！今までの最速タイム１２分！新最速タイムを叩き出すぜ！

皿洗いをしながら、明希は遠くで大きな衝突音が聞こえ、苦笑いを浮かべる。

「今大きな音がした・・・・・・」

「あいつに１０分の壁は高かったな」

「何意味の分からないことを言ってるんですか。この後長門さんの服や日用品を買いに行くんですから、早く準備をしてください」

「もしかして・・・・・僕は荷物持ち？」

「・・・・ごめんなさい・・・・・・・・」

俯き、長門の小さい体がより一層小さいくなったように感じれる。

これが、申し訳ないと思う、罪悪感。相手の目を見ることが出来ない。

「なに言ってるの長門君！君の為なら僕は炎の中水の中！どこにだってパパは駆けつけるよ！なんなら僕の息子もお手伝いごはぁぶぅ！」

「そうよ。私たちは長門さんの為に自分からするの。貴方は謝らなくていいのよ」

「・・・・・・明希さん・・・」

「明希さんじゃなくて、私のことはお母さんって呼んで。私も長門さんのことを有希って呼ぶから、ね」

笑顔を浮かべて、明希は長門の手を取りそう言う。

なんだか、体の奥が温かくなるのを感じる。この気持ちはなんだろう？これは嬉しい、という感情なのだろうか？

一つ、分かったことがある。

「・・・お母さん」

「はい、有希」

お母さんの手は、とても温かい。

完全に遅刻が決まった時間。破損の激しい『遊星号』を押し、傷だらけの遊星と、一目で分かる程怒っているリオンが校門前にたどり着いた。

新最速タイムを出す無理な運転をしていた遊星の前に、リオンが現れ・・・・・・

速度を出しすぎた避けれる分けも無く、

「お前、今何時か言ってみろ」

「遅刻タイムかな（キリッ」

「そうか・・・・俺の代わりにハンバーガーの具材になれよ」

「酷！てかあの七不思議信じてるのかよ！」

だが謎の多いドナルドから逃げられるか考えた挙句、二人は隠密に教室に入り、堂々と朝から居ましたと絶対無理な作戦を実行することにした。

まず、『遊星号』を自転車置き場に停め、周りを気にしながら静かに、そして素早く学校に侵入。

「よし！誰にも見つかっていない！」

「このまま行くぞ・・・・・待て！」

「どうしたリオン・・・・・・・なっ！」

教室へと向かおうとする二人に立ちはだかるドナルド。親指を立て、

「お前ら、具材行きな」

その瞬間。ドナルドの間を潜り抜け陸上選手ビックリの速さで逃げる。

二人の頭には『追いつかれたら人生の終着点』それだけ。

壁を蹴り、遊星は隣の校舎の２階へと跳び、窓の中へ転がるように入り外を見ると、

逃げるリオンの後ろに、包丁を持ったドナルドが恐ろしい顔を浮か追いかけている。

追いつかれるのも時間の問題か・・・・・

否！俺は友を見捨てない！

「リオオオオオォォン！！」

遊星は友へと窓から手を伸ばす、

だが、友はその手を取ることは無く、足を止めた。

「遊星・・・・・僕はここまでだ・・・・・・・後は任せる・・・・

・・・必ず教室に行けよ・・・・・・」

笑を浮かべ、リオンは後ろからやってくる化け物を受け入れる。その光景に遊星は涙を流し、友の思いを受け教室へと向かう。

遊星は1人りじゃない。リオンの意思を背に走る。

友の絆、友との約束、教室へ。

涙が流れる。友情が生み出した奇跡。

そして、遊星は友の約束を守り教室の扉を開け、

「遊星、遅刻」

担任のスネーク先生に遅刻を宣言され、泡を吹いて気絶しているリオンを片手に、悪魔がやって来た。

学校に悲鳴が鳴り響びく。

第5話　その好きは違う好き

激しい激戦の末。今後一切遅刻しないと誓い、悪魔はやっと遊星とリオンを開放してくれた。

あのピエロの前に居ると生きた心地がしないぞ・・・・・・・

「お前たち危なかったな」

「本当に・・・・もう死を覚悟した・・・・・・」

帽子の位置を直しながら、承太郎の一言に遊星は青い顔をして返事をする。

もう、絶対に遅刻はしない！

「まあ悪魔は置いといて、今日の放課後俺の家に遊べにこれる人この指と～まれ！」

人差し指を突き立て、遊星は意気揚々とそう宣言する。

長門に友達を作ってあげたいからな。ここは友達の友達は友達戦法いこう！

ああ！俺の七色の脳細胞が怖いな～

「・・・・・・・・・・・・・」

教室中の長い沈黙。

人差し指には誰もこない。これが意図することは？

「貴様ら！血も涙もないのかあああぁぁ！」

「五月蝿い」

「ごふぅ！」

まさか・・・・・この行動が恐ろしい結果を生むなんて・・・・・・

承太郎さんのツッコミで心に銃弾が当たったぜ。

「遊星ｗｗｗｗ突然何言ってるんだよｗｗｗｗｗｗｗ」

「ぐぅ・・・・・損傷９９％・・・・・・実はな・・・・・・」

内藤に聞かれ、昨日の出来事を言おうとするが遊星の口が止まる。

どう説明しようかな？正直に全部話した方がいいのかな？

いや！ここは簡潔に尚且つ世間の風が強く当たらないように！

「昨日出会った女の子が俺の家にいる」

「・・・・・・・・・・・・・・」

ハイッ！誤爆誤爆☆

「成程ｗｗｗｗ二次元と三次元の違いが分からなくなったかｗｗｗｗｗｗ」

「ちょっ！俺はまだ大丈夫だ！」

「遊星・・・・・僕はお前ならいつか誘拐ぐらいはすると思っていた・・・・・・・」

「リオン！一緒に悪魔から逃げた中じゃないか！」

「良い精神病院なら知ってるぜ」

「・・・・・・・本当に真実なんだって」

俺って・・・・・・一体皆にどんな目で見られてるんだよ・・・・・・

「だから！雨降ってる中、傘も差さず立ってるから俺は家まで送ってやろうとしたんだよ。そしたらどこに家があるか言わないし、仕方なく家に連れてったら帰る場所が無いらしくて、今は俺の家にいるの。分かったか」

「ああ！ｗｗｗｗｗｗそれが本当ならまさしくエ〇ゲーの展開だよな！ｗｗｗｗｗｗｗｗ」

「残念、両親は海外に出張とかしてない」

「なんだかとても面白そうな話をしてるんだけど！」

「ちょっと唯あまりはしゃがないヒィッ！」

「何故だか、内藤さんがまた異常な行動を取る気がしたので」

「俺も混ぜてくれよ」

「んふ、僕も」

よし！これだけ友達が長門も喜ぶだろ！

放課後を楽しみに待ち、遊星は人差し指を突き立る。

「ただいま～」

そして放課後。総勢９人の大人数で遊星の家へと入りリビングへと向かうが誰もいない。

その代わり沢山のダンボール箱が積まれ、極めつけは大きなシングルベット。

この大量の家具やベット。理解したぜ。

「上に行こう。そこに長門も居るはずだ」

ゾロゾロと階段を上り、誰も使っていなかった2階奥の部屋に、新しく長門の部屋を作ろうと、長門と明希。割烹着姿の流星が部屋の家具を配置を考えていた。

「ただいま、もしかして現在進行形で長門の部屋を作り中？」

「・・・・・そう・・・・・・」

「おや、今日は沢山友達を呼んできたね。どうも。遊星の父の不動

流星です」

「私は遊星の母の不動明希です。

「初めまして、魂魄妖夢です」

「平沢唯です！」

「秋山澪です」

「リオン・マグナスです」

「空条承太郎だ」

「内藤ｗｗｗｗｗですｗｗｗｗｗｗｗ」

「阿部高和だ、お父さん良い体してるな」

「んふ、古泉一樹です」

「ほらっ、長門も自己紹介しよう」

「・・・・・・長門・・・・・有希・・・・・・・・・」

なんだか1人挨拶が可笑しい人もいたけど、これで長門への最初の掴みは大丈夫だろ。

それにしても・・・・・・

「なあ父さん、長門の服装。もしかしなくても完全に父さんの趣味

が入ってるよな」

室内なのに麦藁帽子に真っ白な純白のワンピース。

父さんの好きそうな服装だこと。本当に自分に忠実に生きるな。

「どうだ！麦藁に白のワンピース！僕のデストロイ息子も限界が近づいてげぼぉふぅぉ！！」

長門の服装に自分を抑えられなくなった流星へと、母さんは置いてあった物が入っているダンボール箱を持ち上げ、勢い良く投げた。

音を置き去りにする速さでダンボール箱が飛んで行き、重い破壊音が鳴り流星の体がくの字に曲がる。

凄い！人間って音速で飛んでくる物がぶつかると体が凹むんだ！

「・・・・流星さん大丈夫なの？」

澪が心配し、遊星に聞こうとすると倒れていた流星が勢い良く立ち上がり、口の端から血を流す。

だが、親指を立て、精一杯の笑を浮かべている。

きっと父さんはカッコつけてるつもりなんだろうな。けど足に相当ダメージを喰らってるのか、ガクガクを震えてますよ。

「もう～流星さんたら・・・・・・お話があるんですけど下に行きましょうか」

「ははははは・・・・・・・・・・うん・・・・そうだね・・・・・・・・・」

「おい！なんだか流星さん物凄い青い顔をして明希さんと下に行ったけど大丈夫なのか？」

「大丈夫リオン。ちょっとリビングが血に塗れるだけだから」

本当に父さんの体は凄い。

毎日致死量以上の血を流してるのに生きているところだけ尊敬できるぜ。

まあこれで心置きなく長門が皆と話が出来る。

「それじゃあ皆、長門に聞きたいことをどうぞ」

昨日の夕方会ったばかりで、しかも今日は全然話していなかったから長門のことを俺は全然知らない。

だから皆と話せる話題と共に、長門のことも知れて一一石二鳥。

やっぱり俺の虹色の脳細胞は凄いぜ！

「それじゃあ・・・・私から」

小さく手を上げ、全員を見回しながら澪がそう言う。

「長門さんの好きな食べ物は？」

「・・・・・・・無い」

ぐはぁ！まさかこれは予想してなかった！

長門に話を続けるという高等技術が出来るか忘れてた！

「そ・・・・それじゃあ嫌いな食べ物は？

「・・・・・無い」

無表情で、長門がワンテンポ遅くそう答えると澪もどうしていいか分からなくなり、全員に目で救援を要請する。

「なら！ｗｗｗｗ長門ちゃんの好きな人は？ｗｗｗｗｗｗ」

「むっ・・・・・・！」

救援要請に、途絶えない笑を浮かべて内藤が買って出るが、

その質問がまた高校生らしい質問で、妖夢は内藤を見て少し不機嫌になる。

ん？なんで妖夢は怒ってるんだ？

「・・・・・遊星・・」

「！！！！！！！！！！」

抑揚の無い声で、ポツリと発言されたその言葉に全員が驚愕し、長門以外の全員の視線が遊星に注がれる。

誰もが驚いている中、一番驚いているのは遊星だった。

ええ！いつフラグを立てた！？

明らかに俺よりも母さんと話していた様な気がする・・・・これといったこともしてない・・・・・

長門と長く話したのは確か・・・・・・

「長門、ジュースでも飲むか？」

リビングのソファに座っている長門に、近くの自動販売機で買ってきた『夏の恋いの味～甘酸っぱいキスのオレンジ～』を渡し、自分も同じ缶のプルタブを開けて一口飲む。

このジュースの会社は、とにかくジュースの商品名が独特で、

他に『冬の失恋の味～忘れたい酸味の恋いのレモン～』や『秋の出逢いの味～香る忘れられない出逢いのコーヒー～』などが売られ、

全ての商品を遊星はよく飲んでいる。

はぁ～旨いな！なのになんで皆は美味しくないって言うんだろうか？

こんなに美味しいのに・・・・・・

ホクホクと口の中に広がるオレンジの甘酸っぱさを感じながら、遊星はジュースを次々と飲んでいると、長門がジュースを開けずに両手で持っているのに気づき、

「飲まないのか？美味しいぞ」

中身が半分無くなった缶を揺らし、遊星がそう言うが缶を両手で包むだけで飲まない。

「・・・・・私がどこから来たのか、何故帰る場所が無いのか気にならないの？」

少しの沈黙の後、やっと重い口を開いて長門がそう言うと、遊星は一気に残りを飲み干し空となった缶をゴミ箱へと投げ捨てる

自分のことについて何も語らない長門。確かに少しは気になるけどさ、

「そんなのどうでもいい。俺はそんな細かいことを気にするタイプじゃないし・・・・・・」

そこと言葉が詰まり、言葉の続きが気になっている長門の視線感じ、頬を掻き長門から視線そらし

「な・・・・・長門が笑ってくれたらそれでいい」

雨の中、長門を見た時は傘を忘れて雨に濡れてるんだろうなと思ったけど、

その無表情の顔を見ていると、俺には悲しんでいる様に見えた。

何故悲しんでいるのか？長門が話したくないなら聞かない。

だから、

「ほらっ！早くジュースを飲めよ」

笑ってくれれば、それでいい。

・・・・・駄目だ。全然分からない。

もしかしたら寝ている間に俺が何かしたのか・・・・・・・

「後、お父さんとお母さんも」

お父さんとお母さんも？

なんだ、そう言うことか。

「お前ら誤解するなよ、長門の好きって言葉は恋愛感情の混ざったのじゃなくて、大切な人って意味だ」

「・・・・・・よく分からないけど多分そう・・・・・・」

ふぅ、ビックリした・・・・・・

あともう少しでエ〇ゲーの主人公のレッテルを貼られるところだった。

「そうなんだ。もう少しで誤解するところだったよ～」

「やれやれだぜ・・・・・・あの変態遊星を好きになる物好きなんていないだろ」

「んふ、そうですか？僕は遊星君の体、好きですよ」

「俺もだ。程よく引き締まったその体。美味しそうだぜ」

「じゃあｗｗｗｗｗ俺にもチャンスがあるってわけかｗｗｗｗｗｗ」

「・・・・・・・・・チャキ」

「承太郎！俺は変態じゃないぞ！少し自分に素直すぎるだけだ！」

全員で盛り上がっている中、一人置いてけぼりにされた長門はその光景をまるで他人事のように見ていた。

さっきの遊星の言葉。

・・・・・確かにお父さんとお母さんの好きはそうかもしれない。けど、

遊星への好意、好きはなんだか少し違う気が・・・・・・

長門が笑ってくれたらそれでいい。

遊星のこの一言に、お母さんが与えてくれたあの嬉しい、という感情と違い、

心臓の打つ音が少し早く、そして大きくなるの感じ、遊星の顔を見れなくなった。これは恥ずかしいという感情？

新しく出来た疑問へ長門が集中している中、遊星は必死で自分の可

能性を説明していた。

第６話　悪魔の様な天使（前書き）

話の都合上第６話は短いです。
作者を罵てってください、Ｍですから（キリッ

第6話　悪魔の様な天使

「やっと長門の部屋が出来たな」

リビングにあった家具を置き、ピンクを基調とした部屋を見渡し、疲れ果て可愛らしい花のデザインのカーペットへと遊星は座り込む。

あの後、長門に質問をするがどれも一言返事で、あまり長門のことを知ることは出来なかった。

ここまで謎に包まれてるとは・・・・・・

額に薄らと汗を浮かべ脱いでいた愛用の青いジャケットを手に取る。体が糖分を欲している。

そういや、俺の好きなジュースの会社『オラ・オーラ』が新しくお菓子を発売したんだったな。

「はい・・・・・・」

お茶の入ったコップを遊星に向け、長門は自分の部屋を見回す。

「ありがとう。どうだ！長門の部屋だぞ」

自分の仕事を労う様に、遊星は達成感と共にお茶を勢い良く飲み清々しい笑を浮かべる。

しかし、長門は無表情のまま、何も言わず部屋をジーっと見つめたまま。

・・・・・大丈夫。長門は常時無表情っ子だからな。別に長門が嫌がってるからって何も言わ無いわけじゃ・・・・・たぶん。

「・・・・・とても明るい部屋・・・・」

「母さんが選んだらしい。女の子だから明るく、可愛い部屋にだって」

だけど、少しだけ長門の無表情に隠れる表情が分かるような気がしてきた。

「・・・・ありがとう」

「ああ、どういたしまして」

汗を流しただけはあったな。

飲み干したコップを長門に渡し、ジャケットを羽織り、

「今から少し買い物に行ってくるよ」

晩飯前だけど、甘い物を食べてもいいよな。

「・・・・行ってらっしゃい・・・・」

長門に見送られ、車庫に停めている『遊星号』へ鍵を入れ、何を買おうか考えながら発進する。

街灯が夜道を照らし、涼しい風が疲労した体を安らぐ。

なんだかんだで、長門は皆とは仲良くなれたし俺の友達の友達は友達戦法も成功しだったな。

まあ・・・・何故妖夢が怒っているのか最後まで謎だったけど。

けど、少し長門の表情が和らいだような気がする。誰かと接して少し変わって気がする。

風を浴び、自分のしたことが無駄じゃなかったことを感じながら走っていると、まるで光が避ける様に、一体を暗闇に包まれた空間に、

一人の男が立っていた。

その暗闇の中で異様に目立つ白い髪、白い体。

なんだ？偉く真っ白な人が立ってるな？純情な白いでいたいんだろう。

勝手なことを考えながら、遊星が男の居る空間に入ると、全身に何か得体のしれないものが纏わり付くのを感じる。

突然の出来事に、遊星が慌ててブレーキを掛けると白い男が遊星へと近づき、

「やっと二人っきりで会えたなぁ。遊星くぅン？」

「何故、俺の名前を知っいる？」

暗闇の中で一際目立つ白い顔、口元を釣り上げ悪魔の様な笑を浮かべる男に、遊星は恐怖を感じ一歩後ろへと下がる。

「そんなことはどうでもいい、それよりも・・・・お前は昨日、人間モドキを自宅に連れ込ンだよなぁ？」

人間モドキ？何を言ってるんだ？

自宅に連れ込んだった・・・・・長門のことなのか？

「・・・・・長門のことを言ってるのか？」

「クッ・・・・・名前まで付けたのかよぉ～愛着沸いてるなァおい」

人を馬鹿にしながら、男は笑う。

その笑は少し、狂気が入り交じっていた。

遊星はこの時、目の前にいる男は長門を探して、

明らかに長門の為に探しているわけではない。自らの為に探していると理解した。

「とにかく、人間もどきをここに連れてきてくれ」

「断る。第一お前は何故長門を探している？どこからどうみても長門との家族、お友達とかには見えないが」

「はァ！？なんで人間モドキの家族やお友達にされないといけないんだよぉ。笑えない冗談だ！気持ち悪くて鳥肌が立ってきたぜ！」

こいつ・・・・・・！

拳に力を込め、遊星は今まで一番の怒りを覚え、強く歯を噛む。

イエス・キリストも言ってたよな。

右頬を打たれたら、左頬を向けなさい。けど、

友を馬鹿にされたら相手の両頬を殴りなさいと！

怒りに我を忘れ、男の顔へと遊星は拳を振り上げる。

だが、遊星の拳は男に当たらずに、見えない膜の様なものにぶつかり物凄い力で跳ね返され後ろへと飛ばされた。

男を殴ろうとした拳が赤く腫れ上がり、腕に激痛が走る。

俺は確かにあいつの顔を狙った！だけど拳は見えない膜に遮られ・・・・・跳ね返された。

「人間じゃあ俺に傷一つ付けられない。俺は天使だからなァ」

「っ・・・・天使だと？悪魔の間違いじゃないのか？」

「クハハハハハハハッ！！それ最高！！」

天使と名乗る男の嫌な笑い声が耳に響く。

本当に・・・・こいつの笑い声は悪魔の声にしか聞こえないな。しかも電波受信して天使だと？

見えない膜のせいで、その台詞は笑えないぜ。

「今、お前は俺がお姫様を拐おうとする悪者で、お前はお姫様を守るヒーローに見えるか？けど現実は違う」

苦痛に耐えながら、残った左拳に力を込めている遊星の顔を覗く。

なんだ？悪魔が俺に一体どんな間違い指摘てくれるんでしょうか？楽しみで残った方の拳がお前の顎を狙いそうだ。

暗闇に浮かぶ笑顔が、

「人間モドキの存在が、人間界に破滅をもたらすんだよ」

悪魔の指摘に、遊星はただ驚愕することしか出来なかった。

第7話　分かりきった天秤

長門が・・・・・・人類を破滅に・・・・・・

こいつ、宇宙人から電波でもやっぱり受信してるのか？

「何言ってるんだよ、あんな女の子に何ができる？まさかサイヤ人だって言うのか？」

「お前こそ何言ってやがる？あいつは女の子でも、ましてや人間でも無いんだよォ」

「人間じゃ無い・・・・・」

こいつは、最初から長門のことを人間モドキと言っていたが、

それが関係してるのか？

「少し天使様がお前にレクチャーしてやる」

男は遊星の前に座り込み、遊星が絶望の表情を浮かべるのを楽しむように。双方の眼を大きく開く。

「お前たち人間が暮らすここ、下界を人間界。もっと下に悪魔共が犇めき合ってるのが魔界。そして俺たち天使たちの世界、天界。俺は天界のボスでもある『神』の命令で人間界に来た」

天使と悪魔か。

そんな話は教会でしてきてくれ。俺は仏教派だ。まぁ、キリストの名台詞は好きだけど。

しかも目の前の悪魔顔が天使なんだろ？天界にはこんな悪人顔の天使が愛とか正義とか語ってるのか？

怖くて今日から夜眠れないわ！

「俺たち天使は、天界で誕生した時から個々が『天力』と呼ばれる超能力を持ってるわけだ。俺の『天力』は『一方通行』ベクトルを操る能力だ」

チートだろそれ！？なんだよその「小学生が考えた最強キャラ」みたいな能力！

だから俺の拳は当たらなかったのか！ベクトルを反射して逆に俺が吹っ飛んだ。そりゃ鍛えなくても最強だから体ももやしなんだろうな。

毎日不健康な生活ばかりしてそうだし・・・・・

「おい、今とても失礼なことを想像しなかったか？」

「いや～別に～」

「チッ・・・・・少し体を鍛えるか・・・・・・・・」

自分の真っ白な細い腕を摩りながら、男は自分より筋肉のある遊星の体を見てそう言う。

・・・・・俺、天使に肉体美で勝った。

「『神』は天使たちがもつ『天力』を複製して、ある入れ物に保管している」

「なんで入れ物に『天力』を複製して保管する必要があるんだよ？てか『神』なら『天力』ぐらい作れるだろ」

「詳しくは知らないが、『神』は自分から『天力』を生産することは出来ない。だが天使を生み出すことで『天力』を作り出せる。『神』は『天力』を集めて何かするとか言ってたけどよぉ」

はははは・・・まるでガチャポンだな。

「時を遡ること昨日、何時もどおり俺たちを顎で扱き使う『神』はふと、あることを思いついた」

忌々しそうに男は拳を震わせながら暗闇の空を見上げる。

きっと人使いの荒い『神』なんだろうな。

だが、そんな軽い気持ちでいられたのはここまで。遊星は男は話す次の言葉からこの物語が動き出す。

「自分の力を入れ物に入れたどうなるだろうか？」

『神』の力を？

今の話で超能力を持った天使を生み出すことが出来る、唯一無二の存在。

何かを生み出せる、まさしく『神』の力を入れれば、

「馬鹿な『神』はそれを実行、その結果入れ物は数え切れない『天力』と、『神』の力を秘めた魂へと変わった」

新たな【神】の誕生。その【神】は『神』より力を持って誕生した。

「その魂は人間界へと降り、その後人間を見て自分を構築。それが人間モドキの正体」

妖精どころか神様だったとは、これは恐れいりました。

だけど、それじゃあ人類が破滅するのとは関係が無い。

「人間モドキは何も分からずに、無意識に自分を人間として構築した。自分の意識では力を使えないが、。だが人間モドキを利用しようと下衆な悪魔共が、『神』の力を手にしたら？悪魔共は人間界、天界を滅ぼして天下取りするだろうな」

ここで悪魔が出てくるのか。確かに生まれたばかりの無垢な存在の長門を利用するなんて悪魔らしい。

父さんや母さん、友達。世界中の人々の命には変えられないよな。

長門も、悪魔に利用されるなんて嫌だろうし。

「なら、お前たちは長門を保護してくれるのか？」

「はァ？お前何を言ってるんだァ？何故危険因子を残しておく？」

「えっ・・・・・・・？」

呆れ顔で、男は遊星を見る。

悪魔は長門を利用しとうと、天使は長門を・・・・・・

「危険因子は消滅してもらわないとな」

長門に、誰も救いの手を差し伸べなのか？誰も長門を助けてくれないのか？

「さァ、『世界中の全ての生命』と『たった一人の人間モドキ』どちらの方が重いのか、赤ちゃんでも分かるぞ」

頭の中で記憶がフラッシュする。

自分の道を行く自由奔放な父さん。家族のことを第一に考えてくれる母さん。

本当は優しいリオン。いつも溜息ばかり吐いている承太郎。真面目で常識人の妖夢。気の合う内藤。凄い歌を披露してくれる軽音部の澪に唯。兄さんの様な存在の阿部。喋り方がキモイ古泉。

重い・・・・・・・

一つの為に変えられない、重い。

だから・・・・長門を見捨てるのか？

「・・・・・・・今、答えは出せない」

「チッ・・・・・・まあいい、お前の協力が無いと人間モドキは天界に連れていけない。無意識で力を発動出来るかもしれないじゃじゃ馬を俺一人で連れて帰るなんて危ない橋を渡りたくないからな。協力者がいないとな」

俺が、決断しないと長門を連れて帰れない。

これは言い換えれば、俺の決断でどっちかの天秤の中が落ちる。

大切な人と生命か、大切な人。

頭ではどっちを優先するべきか分かってるのに！

「明日、また同じ時間にここにこい。そこでどっちを選ぶか聞かせてもらおう」

立ち上がり、男は暗闇の奥へと歩いていく。

「俺の名前はアクセラレータ。最初に言っておくが、俺はお前を痛めつけてでも協力者になってもらうからな」

体に纏まり付いていたものは無くなり、痛む腕を庇いながら『遊星号』に乗り、自分がどうするべきか、答えを求める様に夜道を駆ける。

遊星と別れ、アクセラレータは苛々しながら胸を掴む。真実を遊星に告げたときの、あの表情。絶望に染まったあの顔。

胸くそ悪い！どうして人間モドキにあそこまで肩入れする！

昨日出会った相手、しかも人間の心など持っているはずがない。感情の無い作られた力の集合体。

それなのによォ。どうしてお前はあいつを切り捨てるのに苦しむんだ。

最初は、馬鹿な『神』の尻拭いだと思って面倒がってた。感情など無い集合体の駆除。

俺は良心など、最強の名を手にしたときに捨てた！何か守る為には、自分が敢えて恨まれよう構わないと誓った！

どうして不動遊星のあの泣きそうな顔を見て、俺の心が痛むんだ！

理由の分からない心の痛みを消す様に、もっと奥深くの暗闇へと体を沈めていく

第8話　救われない少女（前書き）

１７２５アクセス数だって
アクセス数が増えてるよ、やったねた〇ちゃん

第8話　救われない少女

「・・・・・・・ここ・・・・何処？」

ブオォォ！と大きな唸り声を上げる船の汽笛、静かな海の音。

完全に・・・・・迷子しちゃったな。

色々なことが頭を過ぎり、それでもどうしていいのかも分からず
エンジン全開フルスピードで走りづつけた結果、

青い顔をしながら、自分が居る所が分からない、未開の地に降り立
っていた。

はぁ・・・・仕方無い、来た道を感を頼りに帰るか。

波音を背後に、遊星は『遊星号』に乗り走り出す。

時刻は9時を差している。

悪魔の様な天使の降臨。長門は人間界に破滅をもたらす存在。分か
りきった天秤。大切な人たちと全ての生命か大切な人。

どれか一つなんて選べない。きっと他の人なら一つの命を切り捨て
て沢山の命を救うだろう。

これは我侭なんだろうな。しかも世界を巻き込む究極の。

月の光に照らされ、ついさっきまで味わっていた暗闇を浄化しなが

ら、頭の中に巡る思いを振り切りる様に帰路を探していると、本当の目的地だった皆大好きファ〇リーマートの看板が見えた。

・・・・・・お菓子でも買ってくか

見覚えのあるリボンが、お菓子コーナーの方に見える。

「妖夢をお菓子を買いに来たのか？」

後ろから遊星がそう言うと、目を細めながら集中して見ていたお菓子を慌てて棚に戻し、妖夢は取り繕う様に笑を浮かべる。

「あはははは・・・こんばんは」

「ああ、それよりも妖夢がお菓子が好きなんて少し意外だな～」

「なっ！？べべべべ別にお菓子が好きなわけじゃ！ただ現代のお菓子はどんなのがあるのか少し気になっただけです！」

顔を真っ赤にして両手を目の前で振りながらバレバレな否定をする妖夢を見て、自然と笑が溢れる。

今さっきまで重いことばかり考えてたからな、少し落ち着いた。妖夢に感謝しないとな。

腕を組み、遊星は心の中で盛大に感謝していると、まるで悪いことでもしているかの、人を警戒する様に妖夢が周りを見回す。

時間が時間だからか、店内に人は少ない。

「遊星さん、一つ聞いてもよろしいでしょうか？」

「なんだ？」

聞くべきか、聞かないべきか迷っているのか、同意を求めた後なのに妖夢は一言も喋らなくなったが、決心したのか腰に帯刀している刀の柄を握りながら、

「・・・・・今、内藤さんに好きな人っているのでしょうか！？」

決心が空回りしすぎて店内にとても恥ずかしい言葉が響く。

・・・・・・な～るほど。

今日、なんで妖夢が怒ってるのか分かった。そりゃあ片思い中の男が、女の子に好きな子はいますか？なんて聞いたらそりゃ怒る。

しかし分からないのは何故妖夢が内藤のことを好きになったのか？毎日内藤が問題を起こしては妖夢が制裁を下す・・・・・まさかこれって、小学生が好きな子に悪戯する的な？

「あの変態馬鹿に好きな人がいるとか、浮ついた話は聞いてないな」

「本当ですか！！」

妖夢は健気だな～どうしてあの変態が好きになったのか本当に気になるけど、まあ人それぞれだしな。

「しかし本当に驚きだな、まさか妖夢が好きな人が内藤だなんて」

「べ、別に内藤さんが好きだってわけじゃなくて！！内藤さんが好きな人に、自分の欲望を抑えられ無くなり暴走しないか心配だから聞いたんです！」

とても否定しきれないことを。

けど俺は応援するぜ。

・・・・・応援？今目の前にいる、健気に青春を享受する女の子の命と、大切な命を天秤に掛けてる俺が？

もし、俺が長門を選ぶと？

天使たちは『神』の力を恐れて長門に近づけず、悪魔はきっと甘い囁きで近づくのだろう。

長門は天使を見ている、警戒の対象になっているかもしれないが、悪魔を知らない。

悪魔が世界を生命全てを滅ぼそうと力の限りを尽し・・・・・・・

目の前の、思いを胸に秘めた女の子は・・・・・・・・・・・・・・・

「妖夢、その恋、叶うといいな」

命を天秤に掛けてる俺が言える台詞か？

妖夢の返事も待たずに、遊星は探していたお菓子を片手に、レジで

精算し外に出る。

どうして俺に決定権があるんだ？天使は詳しく説明もせずに消え去りやがって、協力者なら他の人を選んでくれ。

俺には選べない・・・・・・

気がつくと、遊星は自宅の目の前に着いていた。答えを出せないまま。

「ただいま・・・・・」

車庫に『遊星号』を停め、暗い表情を浮かべながらコンビニ袋を片手に家に入る。少し足取りが重い。

「何処の行ってたの遊星？夕食、温めてあげるから食べなさい」

「・・・・・・・・ごめん、今日はいらない」

遅く帰ってきた遊星を叱らずに、心配しながら明希は夕食を勧めるが遊星はそれを断る。

母さんごめん、今は一人になりたいんだ。

階段を上がり、自分の部屋へと逃げ込むように遊星は入るとすぐにベットの上に横になる。

もし、俺が長門を家に連れてこなかったら、俺と長門が出会っていなかったら。

こんな重い天秤を知ることも無く、今までの生活を送れたんだろうな。人の恋路を応援して、仲間と馬鹿騒ぎして、

それで時には怒られて、それでも俺たちは反省しなくて、・・・・・・・

遊星の頬に、一筋の涙が流れる。

「・・・・・・・・・・遊星・・・」

ドアをノックする音の後に、遊星を呼ぶ長門の声が聞こえる。

返事も言えずに、流れる涙を手の甲で吹いてると部屋主の承諾も聞かずに長門が入ってきた。

「どうした？夕食も食べないで？」

「・・・・心配しなくても大丈夫だ。ちょっと食欲が無いんだ・・・」

こんな情けない顔、長門に見せられないよな。

なんとか笑を作ると、コンビニで買ってきたお菓子のことを思い出し、無表情のまま立ち尽くす長門に、

「新発売のお菓子だ。一緒に食べよう」

コンビニ袋に入っていたお菓子を一つ手渡し、自分もお菓子を取り出す。

『動き出す衝動～恋のドロドロ三角関係チョコレート～』と書かれた包装紙を破り、コンビニ袋と共にゴミ箱に捨てて、チョコレート特有の甘い香りに少し落ち着き、一齧りする。

口の中に広がる味カカオの香りとミルクの滑らかな舌触りに、買ってきて満足していると、長門も包装紙を破り、ゴミ箱に捨てて食べる。

「甘い・・・・・・」

正直な長門の感想に、悪魔の様な天使こと、アクセラレータの言葉を思い出す。

人間モドキ。

あの似非天使。どこが人間モドキだ。チョコレート食って甘いって、分かりづらいけど微笑む。

正真正銘人間だ。俺の大切な人。誰とも比べられない。そう、皆も。

「・・・・・遊星」

体が小刻みに震える遊星の体を見て、長門は優しく遊星の頬に両手を当てる。

手から人の温かさが伝わっていく。

「・・・等々私の正体が分かったの・・・・・・」

何時もの無表情と違い、はっきりと分かるほどに悲しそうな顔をする長門。

もしかしたら、長門は全て理解しているのか？自分の存在がどう傾くか。天使が自分を消そうと、悪魔が利用しようとしていると。

小さなその手を握り締め、

「何ってるんだ長門、お前の正体とか知らないし分からなくてモーマンタイ。長門は長門だろ？」

俺って、嘘つくのが下手だな。

長門を見捨てていいのか？天使にも悪魔にも狙われている長門を？

「・・・・・私を優先しないで。他を優先して」

そんな寂しそうな笑を浮かべるなよ。誰も長門に救いの手を差し伸べないのか。

手を伸ばして、いますぐ長門にお前だけは俺が守ってやるって言いたい。でも、俺は言えない。

そうすれば今度は片方の天秤を切り捨てることになる。

俺の絆って・・・・・そんなものなのか？

第9話　強い絆　前編

俺は長門に何も言えず、兎に角自分の部屋に戻る様に言い、精神的に疲れ眠気に完敗し、俺は風呂にも入らずそのまま眠りについた。

皆が、長門が俺に助けを求める。

どちらを選ぶか決めれない俺に、アクセラレータが囁いていくる。

「人間モドキを消さないと山程死体の山が作られるぜェ」悪魔が「長門を見殺しにするのか？可哀想な長門。皆に追われて、誰も救いの手を差し伸べない」

やめてくれ！俺には決められない！

真っ暗な道を遊星は走る。後ろから助けを呼ぶ声が追いかけてくる。それを振り切るために、聞こえてくる声全てをかき消す様に大声を上げる。

何かの手が遊星の肩を掴む。次は腕、次は足へと、

闇に引きづられていく。恐怖を感じるが抗う気力は無い。

そして・・・・・・長門のあの無表情の顔が俺を見つめて・・・・・・

「うわあああああぁぁぁ！！」

息が乱れ、遊星は嫌な汗のせいで服が体にへばりつく。

もう、朝か。

何時もより早く目が覚め、汗と悪夢を洗い流す為に風呂場へと向かう。

・・・・母さんは起きてるな。折角ご飯を作ってくれたのに食べれなかった。

「母さん、おはよう」

軽快な音を響かせながら、包丁で野菜を切っているエプロン姿の明希へと、遊星は少し後ろめたさを感じる。

「あら、今日は早いのね。お弁当作ったから残さず食べてね」

「ありがとう母さん・・・・・・シャワー浴びてくるよ」

風呂場の蛇口を捻り、熱いシャワーを頭から浴び、今でも鮮明に残っている悪夢を思い出す。

長門は俺に自分でなく、俺たちを優先しろと言った。

だが本当はどうだ？心優しい長門は自分を犠牲にして、誰も救いの手を伸ばさないで・・・・・・・・

無表情の後ろには何が隠れている。ただ何も感じないのか？違う！

俺に救いを求めている！じゃあ救いの手を俺は差し伸べるのか？夢の中の無数の手。あれが長門と対をなす天秤の重さ。

昔、父さんが言っていた。

俺の名前の由来、遊星は人と他人を結びつける絆、そんな存在になって欲しい。

絆が溢れる。俺は繋げなのか？救えないのか？

シャワーを浴びながら遊星は汗とあくむを洗い流していると、風呂場のドアを開く音が聞こえ、

「朝からお風呂とは！お前もカッコつけるじゃないか！」

朝から元気よく素っ裸で、流星は遊星と同じ蟹頭を揺らしながら入ってきた。

裸体なのだから、遊星は嫌でも下半身のエレファントボーイを見てしまい、

・・・・・俺より大きくないか？

「どうした遊星！暗い顔をして！僕は昨晩はお楽しみで今日は元気が良い！！」

「おい頭のネジが百本抜けてる父さん。息子の前で両親の人体の神秘を言ってて教育としてどうだよ？」

「・・・・・・・・・子供は、コウノトリが持ってくるんだよ」

うわぁ・・・・・・この人それを俺に信じろと？

全言撤回。脳みそが無い。

「それよりも、母さんに聞いたぞ？昨日は夜遅くにネガティブフェイスが帰還したって。何かあったのか？」

辛い所を突いてくるなこの人は・・・・・・

「別に、昨日の出来事といったら大人の本の袋閉じを先に破かれてたぐらいかな」

「おい！それは本当か！！本当なら今すぐ犯人に袋とじの何たるかを教えに行くぞ！」

何この変態。怖い。なんで母さんはこんな危険人物のどこを好きになったんだろう？

幸い名前の由来は真面なのでよかった。この人のことだから、絶対名前の候補に誠はあっただろうな。俺に皆から死ねと？

はぁ・・・・・もう風呂から出よう。

シャワーの蛇口を締め、遊星は逃げるように風呂場のドアを開こうとすると、

「父さんはな、お前なら何でも出来ると信じてるぞ。なんたって俺と明希の息子だからな。サラブレットだ」

５０％が普通な血と、５０％と危ない血のサラブレットな。

・・・・・でも、俺は何でも出来るような、ましてや名前通りの息

子じゃないよ。

時間にゆとりのある遊星は、朝食を取り学校へ行く準備を終わると長門の部屋の前に来た。

昨日のことで話したかった遊星は、部屋のドアノブに触れようとすると、触る寸前で手が固まる。

今、長門に会って何を話す？天秤の結果を決めるのに長門の顔を見ていると辛くなるだけ・・・・なら、もう長門とは話さない方が・・・・

「・・・・・遊星、部屋の前に居るの？」

踵を返し、部屋の前から離れようとする遊星に、部屋の中から抑揚の無い長門のか細い声が聞こえる。

このまま無視しようとするが、遊星はドアの前に立つ。

長門の言葉に耳を傾けないのは、現実から逃げるだけかもしれない。

「俺が部屋の前に居るってよく分かったな」

「気配がした・・・・・」

気配って、階段を上がる音とかじゃなくて？長門は知らない内に忍者レベルまで成長していたのか。

『神』の力って凄いな。

どっちも話さず、嫌な静寂が流れ、

「・・・・・・昨晩のこと、忘れないで」

歯を強く噛み、遊星は返事をすることもなく静かに階段を降り、車庫から『遊星号』を出し、発進する。

昨日の朝の俺は、明日の登校がこんなに嫌な気分になるとは思わないだろうな。

ただ毎日が楽しくて、早く明日になればいい。子供みたいに未来に心踊っていた。でも未来はこんなに辛いものだったのか。

変わらないで生きていくのは無理なのは分かっている。これでもサンタさんが実は父さんだったのは中学3年に気づいた大人だ。

・・・・・けど、ここまで変わるとは・・・・

世界の命運を分けた天秤を決定権。たぶん宝くじで1億当てるよりも凄いことだろうけど、全然嬉しくない。

「おっ、今日は早いな遊星」

「今日は僕を轢くなよ」

身長差が激しい、承太郎とリオンがバイクのエンジン音に気づき、後ろからやって来る遊星の方を向く。

承太郎とリオンとは高校からの付き合いだけど、二人を昔からの友達の様に感じる。

「ちょっと早く目が覚めてな。お前たちも早いな」

「俺は親が煩くて早く起きからで、リオンは昨日やってた心霊番組が怖くて眠れずに早めに登校したんだろ」

「何言っている。僕が作り物の幽霊如きで・・・・・ふわぁ～」

「リオンはとても分かりやすいな」

朝の早くから静かな道を、三人並んで歩く。今になってやっと睡魔が襲ってきたのか、リオンは出来損ないの操り人形様に体を大きく縦に振りっている。

こう見ると、リオンってとても中世的な顔立ちで、童顔だな。中学・・・・いや、身長も低いから小学生でも・・・・・・

「おい、今とても失礼なことを思っただろ？」

「べっつに～ただリオンさんの身長が伸びたんじゃないかな～って

「そ、そうか？身長伸びたか・・・・・・・」

遊星と承太郎にバレない様にと、隠れてリオンが喜び、高身長の承太郎は何故リオンが喜んでいるのか分からず、溜息を吐く。

この二人なら、世界の命運について少し相談してもいいよな。

「なあ、もし大切な人たちと世界中の命か出会って2日の大切な人。

お前たちならどっちを優先する」

自分でもとんでもない質問をしていると自負するよ。電波を受信した人の質問だ。

だが、リオンと承太郎は何時もと遊星が何かが違うことを察し、笑わずに、

「俺なら、大切な人たちと世界中の命だな。未来が沢山ある方を俺は選ぶ」

「僕は出会って2日の大切な人・・・・・守りたい人の為なら全てを敵にしても僕は構わない」

二人らしい答えだ。未来か守りたい人。どっちか決断している。

・・・・どちらを選べば・・・・・・

俺の手のひらで救えきれないのか・・・・・・

絶望が遊星を包み、リオンと承太郎が・・・・・・

第１０話　強い絆　後編（前書き）

チャオ、お盆休みでぐてーとしていました。
今回は少し長めで、次回からやっとこさバトル物語になります。
私もテンションが上がります。

第１０話　強い絆　後編

昨日と同じ時刻に、遊星は某有名タバコに似てるお菓子を咥え、今の自分カッケーと思いながら待つ。

意味も無いのに咥えていたタバコを人差し指と中指で挟み、煙が出る分けもないのに勢い良く息を吐く

子供の様なことをしているとうちに、段々周りが暗闇に包まれていき、得たいのしれない何かが体に纏まり付き、遠くから待っていた相手が来た。

「よぉ、決まったのかァ？」

真っ白な天使。アクセラレータは口元を釣り上げ、闇には不釣合な白い顔を遊星に近づける。

人差し指と中指で挟んでいたお菓子を口に放り込み、噛み砕き飲み込む。

「一つ聞いていいか？何故協力者は俺じゃないと駄目なんだ？」

「そういや説明してなかったなァ」

天使なのにドジっ子なんだな～悪魔顔の男だから全然需要無いけど。

いや、考えを逆転するんだ！実はアクセラレータは女の子だって！

胸は虚しい程に無いだけだって！

「人間モドキが完全に心を許してる存在。家に連れ込みお優しく住まわせてあげてるお前が、天使はお前を保護してくれるよ～って囁いてくれたら簡単に天界に連れていけるからな」

「お・・・そ、そうか・・・・・・」

「なんだァ？ソワソワして？」

俺って気がついたらフラグを立てる。ふぅ～フラグ男を名乗らせてもらおうかな。

だけど俺にはパソコンの中にいる嫁が・・・・・・くっ・・・・・・・・・

「でェ？お前はどっちの天秤を選ぶんだ？」

「・・・・・・・・風子」

「おい、お前本当に人の話を聞いてたかァ？」

すまない、アクセラレータ。俺には風子って大事な嫁がいる。俺のことは諦めてくれ！

「・・・・・ベクトル操作でアメリカ辺りまで旅行させるか」

「物凄く聞いていました」

青い顔をして、鋭い目で睨んでくるアクセラレータに遊星は敬礼する。

冗談の通じない子なんだから☆もう。

「今絶賛腹立ち中だからよぉ。さっさと答えを聞かせろ」

どちらを選んだか。本当に悩んだ。悪夢に苛まれる程に。

考えて考えて、親友のアドバイスを聞いて、俺の大切な人を見回して、やっと答えが出た。俺らしい、答えが。

「どっちも選ぶ」

大切な人と命、そして大切な人も救う。俺の手のひらで全てを救う。

「だか、答えを出す前に俺は両方助ける方法を考えるぜ」

「もう立ち上がれなくなるまで全てを守ろうと頑張るな」

簡単な答え。なんでこんなことに頭を悩ましてたのか、昨日の俺を殴りたい。

「お前・・・それマジで言ってるのか？」

アクセラレータの周りに風が集まり、漆黒の殺意が遊星を貫く。待っていた答えに怒り、笑を浮かべていた顔は、正真正銘悪魔を体現している、

両方とも救うだァ？最強と呼ばれる俺が出来ないのにただの人間に出来る分けが無いだろ！！

ここまで馬鹿とは思わなかった・・・・・笑えないぜェ。

「入れ物となっている人間モドキはとても不安定だ。入れ物なんだからなァ、収められて簡単に取り出せるように出来てる・・・・・お前は悪魔に『神』の力をプレゼントするつもりか？」

「違う！俺は悪魔から長門を守る！」

ガキみたいなこと言いやがって。俺の怒りの沸点が超えた。自分の我侭で全てが滅びようとしてるのが何故分からない！

「『天力』も使えないガキがぁ！！俺たち天使も恐る悪魔から守れるわけ無いだろ！」

「やっても無いのに何故結果が分かる！例え天使と悪魔と神と魔王とか出てきても！！俺は長門を救う！！」

無表情で、自分が犠牲になればいいと思っていて、でも笑ったり喜んだりして、皆と話もできて。物静かな普通の女の子。

それを寄って集って『神』の力を持ってるから利用するとか、危ないから消すとか、

覚えとけ！

「俺の仲間を傷つけるものは！全部纏めて絆でふきとばす！！」

拳を振り上げ、遊星は高らかにそう宣言し、アクセラレータは、目の前の相手にこれ以上口で言っても意味が無いと悟った。

なら、体で教えてないとな。

地面と足のベクトルを操作、ドォン！と爆発音を鳴らし遊星の懐に飛び込み、反射の膜に包まれた右拳が遊星の腹部を殴る。

体が2回転しコンクリートの塀に破壊音と共にぶつかり、打撲や擦り傷などで血だらけになり、口の中に血が溢れ出す。

「がはぁ・・・・・・・・・・」

これが反射の力・・・・・予想異様にチートな能力だ・・・・・・・

こりゃ、肋骨何本かボッキリ折れた・・・・・ワンパンチでもう立てない。

「おいおい！ちょっとお腹を殴っただけなのに面白い様に飛んでったな！2回空中で回転してたぞ！」

耳を劈く様な悪魔の笑い声に、口の端から血を流しながら、遊星は立ち上がろうと力の入らない足に鞭を打つ。

両方とも救うって宣言したのに、これじゃあ情けないだろ？ヒーローは傷だらけになってからが本番だし。

「はぁ・・・・はぁ・・・・・うぶぅ・・・・！そんな・・・・もやしパンチ・・・・・長門の孤独を思えば・・・・・・痛くも痒くも無い・・・・・・！」

少し壊れた塀に掴まりながらなんとか立ち上がり、遊星は無理矢理余裕の笑を浮かべる。

こいつ、負けるの分かっててどうして立ち上がる？正真正銘のマゾってかァ？

なら、満足させてやらねぇとな。

落ちている塀の破片を拾い集め、それをアクセラレータはそれを遊星に向け、

「弾はコンクリートの散弾銃とかどうだ？」

破片を持つ手のベクトルを操作し、遊星へと反射させる。不気味な風を切る音と共に全身に破片がめり込む。

凄い！全身が穴だらけになったような絶妙なこの感じ！簡潔に言うと死ぬ程痛い！

額にも破片がこんにちはしながら突き刺さってるや。

こ～れも長門の為～痛いのなんて人間の感情～俺は人間をやめる～だから痛くない～

「もう一回」

「ごぼぉ！！」

無理！心頭滅却すれば火も涼しい？だから痛みも無視しよう頑張って・・・・・も無理☆

天使のくせに血も涙も無いのかよ！コンクリート弾製散弾銃を２発も！

・・・・もはや体のどこが痛いのか最早分からない・・・・・・・・・・・・・・けど少し痛みが気持ちよく・・・・・・・・・

ベクトル操作で、

第１１話　救いの手を差し伸べよう　前編

「で、どうすればコンクリートの破片が体に突き刺さる事故に遭うんだ？」

「突然・・・・・コンクリート製弾の散弾銃を持った変態に撃たれた」

皮膚の色はチグハグ、極めつけは顔を二分する様な大きな縫い目。間黒男は頬に手を当てながら溜息を吐く。

勢い良く立ち上がり、遊星が絆を再度確信し等々体が悲鳴を上げて倒れた。自分も途中で痛みは無くなり気がついたら意識を失っていた。

いや～感情が高ぶると何もかも忘れるのだな。

古くからの流星の知り合いである黒男に、頭に突き刺さっているコンクリートの破片を指さしながら遊星は苦笑いを浮かべる。

町外れに黒男の家はある為、承太郎と内藤に肩を借りながら家に向かうまでに、段々寒くなる体と遠くなっていく意識に何度か天の声が遊星の頭の中に響く。

普通では、体験出来ない恐怖を感じれたな・・・・・・・

「ふぅ・・・・流石流星の息子だな。嘘を付くのが流星と同じで下手だ」

実は半分は本当だったりして・・・・・・

ベクトル操作で何でも弾を作れるアクセラレータに遊星は恨みを募らさせる

「理由は聞かないでおこう。お前の父親には沢山借りがあるからな、3日で完治・・・・・」

「いや、輸血と傷口が開かない程度に治療だけでいい」

黒男の言葉を遮り、遊星はアクセラレータの攻撃で完全に大破した某お菓子の箱を取り出し、粉状にまで砕けたお菓子を口に入れる。

うわぁ～このお菓子って粉状にしたらこんな感触がするんだ。悪く言えばチョークの粉を食べてる様な・・・・・

「ちゃんと治療を受けた方がいいのでは？」

妖夢の言うとおり、ただの切り傷だけじゃない。骨も折れてるし頭の頭蓋骨の方も心配だ。そろそろ頭に突き刺さるコンクリートの破片を取らないと、とても取り返しのつかないことになりそうだ。

でも、

「時間がないからな。今日中に最低限体を治せればそれでいい」

長門を追いかけているのは天使だけじゃない。

悪魔。

天使は長門が無意識下で神の力を使えると考えて簡単に手を出せないらしいが、悪魔は違う。甘い囁きで誘惑するだろう。

一刻も早く長門の元へ行かないと。

「・・・・・深くまで詮索はしない。お前たち、今日はこの家に泊まっていくといい。隣の客間に敷布団がある」

遊星たちを見ていると、昔の渡したちを思い出す。皆で助け合って、絆を大切にして、そして楽しく過ごした。

それで皆の中心にいるのは、全員の絆を紡ぐ者。私たちの時は流星。

今は・・・・・・

「先生。遊星のこと・・・・・頼む」

「治療が上手にいくように、なんなら景気づけに一発やるか？」

「んふ、僕も参戦しますよ」

私たちの時より物凄い仲間がいるな。

まぁ、流星の血を受けづく遊星なら大丈夫だろ。不動の血は常識外れだ。

遊星を連れて黒男が治療の為にリビングを離れ、承太郎たちは黒男に言われたとおり大広間に向かう。

全員遊星の傷のことを心配しているが、１人。笑を浮かべながら枕

を持ち上げ、

「多人数がｗｗｗｗｗｗ同じ部屋で寝るときにすることはｗｗｗｗｗ」

一番近くにいたリオン目掛けて、内藤は回転をかけながら枕を投げる。見事頭に命中。

これが勝負のコング。

「やっぱり枕投げだよね！」

唯も枕を取り、元気よく掛け声を上げながら妖夢へと枕を投げるが、妖夢は枕を鞘に収めたままの刀で防ぐ。

枕を当てられたリオンは、額に青い血管を浮き出し、自分に当たった枕に怒りを込めて内藤へと投げるが、

「ヒョイｗｗｗｗ」

軽快なステップで横に跳び枕を避けると、後ろにいた承太郎の顔に枕が当たり、リオンはやってしまったとすぐさまその場から離れる。

落ちた帽子を拾い上げ、枕の原型を留めない程に力強く握り、空気を裂く、枕を投げたくらいでは絶対に鳴らない音を出しながらリオンへと投げた。

「くっ！」

床に布団が敷かれているのを利用して、リオンは布団へと倒れ込み、

狙った相手に当たらず、後ろにいた澪の顔に布団を叩いた時になる乾いた破裂音に似た音が響く。

鼻から血を流し、和かな笑顔を浮かべて澪は倒れた。

「テーピング・・・じゃなくてティッシュだ！」

「うはぁｗｗｗｗ承太郎鬼畜すぎｗｗｗｗ」

「ちがっ！俺は！」

「大丈夫！？澪！」

「さて、僕は逃げるか」

「よく考えれば。最初に枕投げを始めた内藤さんが悪いはずです」

「命の危機ｗｗｗｗｗｗ」

「んふ、なんだか騒がしいですね」

「あっちも楽しんでるし、俺たちも・・・・・やらないか？」

「アッー！」

「・・・・・五月蝿い」

「先生！何そのどどめ色の物体Ｘは！それやめくぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ！！」

その日。黒男の家から多人数の悲鳴が響びき、客間に血が流れた。

「あの薬を飲んだら大丈夫だ。今日は私の家で休みなさい、家には私が電話しよう」

「ごぉふぅ！げぶぉ！ぶぶぜら！」

なんだあの物体X！全身の寒気、止まらない嫌悪感。例えるなら胃の中を掻き回されて様な苦痛！

良薬は口に苦い？これは良薬は体に苦しいわ！

部屋から出てい黒男を、遊星は獣の様な悲鳴を上げながら助けを求めるが、なんだかとても爽やかかな笑みを浮かべながら黒人が出て行くのを見て悟った。

あいつ！薬のモルモットに俺を選んだだろ！

患者をモルモットにした黒男は、リビングに置いてある受話器を取り、長い間掛けていなかった番号を押し、相手が電話に出るのを待つ。

5回、6回、7回、音が鳴るが相手は電話に出ない。

家にいないのか？なら流星の携帯に掛けるか。

流星の携帯の番号を押すと、今度はすぐに相手は電話に出た。

「もしもし！」

「私、黒男だ」

どうした？何か慌ててる様だな。遊星が夜遅くまで連絡を入れなくて慌ててるのか。

「久しぶりだな黒男！悪いんだけどまた後で掛け直してくれないか？」

「久しぶりだ。実はな、遊星が怪我をして私の病院にいると伝えたかっただけだ。安心しろ。傷は治したからな」

「何！そっちに遊星が居るのか！」

「そうだ。明日にはお前の家まで送ろう」

「遊星に伝えてくれ！有希がいなくなった！それじゃあ頼むぞ！」

「おい！遊星！」

電話の切れた音が鳴り、黒男は受話器を置き考える。遊星の大怪我。時間が無い。

十中八九、有希とやらが関係しているな。

これは遊星だけの問題じゃないはず。きっと、遊星の仲間にも関わることだろ。全員に伝えておくか。

それにしても、流星は昔と変わらないな。人の話も聞かずに突っ走る。今でも子供だ。

羨ましいことだが、そんなこと流星ぐらいにしか出来ない。
旧友とのほんの少しの会話に懐かしさを心に秘めながら、黒男はこの頃浮かべていなかった笑みが自然に綻ぶ。

怪我で休んでいる遊星は後回しに、先に客間にいる仲間たちの方に伝えようと、客間に向かう。
きっと、遊星の仲間たちも私たちの時の様に素晴らしい・・・・・
「うおおおぉぉ！澪！起きてくれ！俺が悪かった！」
「あっｗｗｗｗ先生ｗｗｗ急患ですｗｗｗｗｗ俺がｗｗｗｗｗ」
「枕投げ・・・・僕はこれほど恐ろしいものだとは思わなかった・・・・・」
「いや～凄いよ妖夢ちゃんは！なんでも刀で防げるんだね！」
「刀があれは銃弾でも防げます」
・・・・・・はははは・・・・素晴らしい仲間だ。

第１２話　救いの手を差し伸べよう　後編

流星に頼まれたことを、承太郎たちに伝え黒男は客間に置いてあった椅子に座り、詮索はしないと言ったが長門と全員の関係を考えてしまう。

だが長門に神の力が宿り、天使と悪魔の標的となっていることを分かる筈がない。

全ての事情を遊星から聞いている承太郎は、長門が一人でいる危険を考え、

「先生。俺たちは長門を探しに行きます」

「そうだね！夜道に女の子一人は危ないよ！」

「・・・・うぅ～」

「んふ、澪さんがお目覚めですよ」

気持ち悪い古泉の喋り方の後に、鼻を両手で押さえながら澪は起き上がり、唯は澪の顔を覗き込む。流れた血は濡れたタオルで拭き、鼻血の痕跡は無い。

澪が目覚め、故意にしたわけじゃないが女の子の顔に枕を投げ、鼻から血が流れる傷を負わせた。

承太郎の額に汗が沢山浮き出る。

どうする・・・・！ここは男らしく土下座か！大穴で何事も無かった様に振舞うか？それは俺の心が許さない。

「み、澪。その・・・・・あのな・・・・」

大きな体を揺らしながら、段々白目となっていく承太郎を見て澪は鼻を押さえながら笑いが込み上げていく。

承太郎君は噂で聞いた様な、恐い人だと思っていたけど違う。

遊星君を見つけたときに、友達を助けたいと怒った。友達の為に頑張ろうといている。

・・・・私が恐がっていただけで、本当は心の優しい人。

「承太郎君。早く長門さんを探さないと」

「でもよ・・・・・」

「私が枕を受け止めようとして顔に当たったの。気にしないで」

私が恐がって、承太郎君の心を傷つけてしまったかもしれない。だから私は承太郎君の外じゃなくて、中を見るわ。

優しく微笑み、心に残っていた間違い捨てて澪は部屋から出ていき、承太郎は何がどうなっているのか分からず、その場で固まり助けを求める様に周りを見回す。

「ふっ・・・・あの承太郎が面白い表情を浮かべているぞ」

「テラワロスwwwwwwww」

「澪ちゃんも承太郎君が、本当は心優しいピュアなことに気づいたんだよ」

「お前たち、早く長門を探しに行くぞ。承太郎も固まってないで、俺の息子でも舐めるか？」

「阿部さん・・・・・自重してください」

澪を追いかけようと、固まっている承太郎をねっとりとした手つきで古泉と阿部が連れていき、その後をリオンたちは付いていく。

・・・・やはり仲間は良いものだ。自分の間違えを見つけられ、そして助け、助けられて、自分と仲間は成長していく。

私も成長できた。きっと、流星たちに溜め込んでいた悪夢を話すことが出来たからだろうな。

長門も、きっと仲間に助けられて、そして仲間を助けるだろう。

仲間を探しに行く承太郎たちを見送りながら、黒男は客間の棚に置いてあるウィスキーのボトルを手に取り、台所にグラスと軟水、そして氷をキッチンに取りに行こうとすると、顔を青を通り越して、茶色になった遊星が、苦しみから脂汗を流しながら客間にやって来た。

「先生・・・・皆は？」

「あの薬を飲んでよく動けるげふんげふん！実はな、お前の父親に、

お前が私の病院に居ると伝えたら、長門がいなくなったことを伝えてくれと言われて・・・・・」

「長門がいなくなった！？」

黒男の言葉に、遊星は焦りから拳に力が入る。

完全に長門の行動は予想外のことだった。だが今朝の長門の言葉を思い出し遊星は唇を強く噛む。

あいつ！俺たちの為に犠牲になろうとしてるのか！１人で街中を歩いていたら天使に遭えると！

皆と勢い良く全員で救うと誓ったのに、長門・・・・・・

「治療ありがとう。俺も長門を探しに行くよ」

『遊星号』の鍵を握り、遊星は黒男の返事を待たずに走り出す。自分が後悔したくないから。守りたい仲間がいるから。

簡易な治療と薬物をでも大怪我を誤魔化せ無い。体中に重い痛みが遊星を襲う。

それでも、遊星は走る。

「頑張れ。人生の先輩が言えるのはそれだけだ」

グラスに注がれたウィスキーを口に含み、黒男は中に入っている氷を、グラスを揺らして鳴らす。

速度を上げ、昨日と同じ夜道を遊星は駆け抜ける。
全員に電話を掛け、長門が見つかったのか聞くが、誰も長門を見つけることは出来ず、ハンドルを握る手に汗が滲む。
アクセラレータは長門と真正面から遭うことは恐れている。長門に眠る『神』の力を恐れているから。
悪魔がこの町にいて、長門を探しているのかは分からない。
だけど・・・・あいつが何処に居るのか・・・・・・
長門と出会ってから3日間。自分と繋がりの深い場所。
十数分走り、遊星は『遊星号』のエンジンを切り、目の前に居る長門へと歩み寄る。
「ここに居たのか、長門」
そこは3日前。初めて出会い、そして名前を付けあの場所。今と違うのは雨が降っていな変わりに、長門が頬を濡らしていること。
「まさか家の近くに居るとは思わないよな。きっと今頃父さんは隣町まで走ってる」
「・・・・・・・・・・・・」
何も喋らず、無表情のまま長門は遊星の方を向かず立ち去ろうとし、遊星は急いで長門の手を掴む。

掴んでいる手は温かく、普通の女の子と何も違わない。
一つ。自分が望んでもいないのに『神』の力を宿していること以外は。
「長門、逃げないで俺の話を聞いてくれ」
俺はこの手を離さない。
「お前が天使や悪魔から狙われても、俺は全てを守る長門も、大切な人たちも」
仲間に教えてもらった。仲間を切り捨てることは俺の絆が許さない。
どれだけ俺は傷ついても、何度も倒れても、
「誰もお前に救いの手を差し伸べないなら！俺が！俺たちがお前を助ける！」
立ち上がろう。仲間が泣いているのなら、俺はその元凶をふきとばそう。絆を手にして。
「だから！長門！俺たちを信じてくれ！」
光が見えた。
何も感じない。暗い、暗闇の中で私は生まれた。
気づけば雨に打たれ、寒い、初めて感じたのが寒い。その次に孤独。
その次に絶望。

自分の置かれている状況が分かっていた。『神』の力を宿し、段々浮かび上がってくる単語。

天使、神、悪魔、存在が世界を滅ぼす、消す、

虚無感。自分に降り注ぐ雨が、この悲しみを落としてくれると思う。気づく。

孤独と絶望が、自分の中で溢れ出す。

このまま1人で消えよう。わたしの存在は危険でしかない。

「へい！そこの彼女！雨に濡れると風引くぜ！俺の後ろに乗りな！」

突然、奇妙な言葉を発する彼が私に近づいてくる。彼が乗っているのはバイク？初めて見る。

今度は何か悩んでいるのか、彼は何も喋らなくなった。

「おい、これ以上雨に濡れてたら風引くだろ。お前の家まで送ってやるよ」

家？私の？それは自分の居場所のこと？

私はの世界に居場所は無い。

何も言わない私の手を彼は掴み、バイクに乗せてくれた。初めて触る。全てが新しい。それでも世界に私の居場所は無い。

「とにかく、俺の家に行くけど・・・・君の名前は？」

名前？

入れ物だった私に名前は無い。

少しだけ、名前が羨ましい。

「・・・・・・・名前、貴方が付けて」

「えっ？俺が！？」

人は誰かから名前を授かる。居場所の無い私に、名前が欲しい。

彼は辺を見回している。

「なら、君の名前は長門有希だ」

場面が変わる。

「・・・・・そう。なら帰る場所が見つかるまでお姉さん達と一緒に暮らしませんか？」

居場所の無い私に、居場所を作ってくれた。

心が温かい。きっとこれが嬉しい。『神』の力を宿しても人間らしい感情を感じれたことに驚く。

「な・・・・・長門が笑ってくれたらそれでいい」

「どうだ！麦藁に白のワンピース！僕のデストロイ息子も限界が近

づいてげぼぉふぅぉ！！」

「初めまして、魂魄妖夢です」

「平沢唯です！」

「秋山澪です」

「リオン・マグナスです」

「空条承太郎だ」

「内藤ｗｗｗｗですｗｗｗｗｗｗｗ」

「阿部高和だ、お父さん良い体してるな」

「んふ、古泉一樹です」

「何言ってるんだ長門、お前の正体とか知らないし分からなくてモーマンタイ。長門は長門だろ？」

「・・・・・・昨晩のこと、忘れないで」

遊星の友達と話して、とても楽しかった。本当に、自分が人だと思えるほどに。

孤独の牢獄の中で、私が助けを求めると大切な人が傷つく。人間じゃない私に、人間らしい感情を与えてくれた人たちを傷つけたくない。

差し伸べられる手を掴めない。

「俺の手を掴んでくれ！」

駄目・・・・・

「長門は1人じゃない！絆を信じてくれ！」

絆を壊したくない。

傷つくのは私だけで・・・・・・！

「んふ、なら僕の手も掴んでください」

「俺の手もホイホイ掴んでくれ」

人の良い笑顔を浮かべる古泉と、周りが薔薇で囲まれている阿部は長門へと手を差しのべる。

「やっと見つけたぞ、早く俺の手を掴め」

「ここでお前を見捨てたら目覚めが悪くなりそうだからな。僕の手を掴め」

「1人なんて水臭いよ！私たち友達だよ！」

「唯の言うとおり、さあ、私の手を掴んで」

「俺のwwww手だけじゃなくて色々なところを掴んでwwwwwww」

「誰かが救いを求めているのに、それを見捨てることは私は出来ない。それが友達なら尚更です」

承太郎が、リオンが、唯が、澪が、内藤が、妖夢が、

もしかしたら、私は生きること諦めていたのかもしれない。自分が人間じゃないから偽りの存在だから。でも、皆の思いを前にして、自分の心が動いて・・・・・

みんなが私に手を差し伸べてくれて、孤独の牢獄が崩れていく福音を聞こえる。温かい光が私を照らす。

1人じゃない。もう自分の存在を否定しない。

涙は止まり、遊星は改めて長門へ手を差し伸べ、

「一緒に戦おう。俺たちの絆を武器に」

差し伸べられた手を取り、欠けていた絆が繋がれた。

日が昇り、日が沈み。昨日と同じ時刻のアクセラレータは昨日と同じ場所に立つ。天使が『神』に許された力、人払いを発動し、

暗闇が周りを包み、体に慣れない感覚が纏わりつく。

昨日死ぬほど痛めつけてやったからなァ。今日こそは協力者になってもらうぜェ

あれだけ大口を叩いたんだからよぉ、きっとまた、ここに来るだろなァ。

指を鳴らし、アクセラレータは暗闇に一際恐ろしく映える赤い目を開き遊星を待っていると、昨日大破したコンクリートの塀近くに立つ、電柱に紙が貼られていることに気づく。

紙を詳しく見ていないが、アクセラレータは直感で理解した。

あいつが残していきやがった。

電柱に貼られている紙を剥がし、

町外れの平原にて待つ

不動遊星

紙を手の中で潰し、自分の感情の高ぶりを抑えようと反射を使わずに電柱を殴りつける。文面から遊星の覚悟が伺える。交渉決裂。これ以上遊星を痛めつけても、遊星は協力者にはならない。

なら・・・・人質にするか

天使と遊星の会合は夜に始まり、夜に終わる。

結末は誰も分からない。

第13話　絆の一撃　ヴィクテム・サンクチュアリ

「遅いぞ、アクセラレータ。女の子を、しかも5人も待たせるなんて死刑よ！死刑！」

「俺の目が悪いのかァ？俺には人間モドキを入れて女は4人しかいない気がするけどよォ？」

「やれやれだぜ・・・な、承太郎、こんな美人5人が居るのに4人しかいないとかあそこの天使は喚いてるぜ」

「黙れポンコツ、そのキモイ口紅を塗りたくった顔を拭け」

体を気持ちく揺らす遊星を、承太郎は出来る限り直視しないように上着のポケットの入れていたハンカチを渡す。

こいつら・・・・仲間を呼んで俺にコントでも見せに来たのかァ？包帯だらけで、松葉杖をつきながら俺の為によォ。

口紅にを塗りたくった顔を唯と妖夢が苦笑いし、遊星は笑っているが、松葉杖をつき、体中に包帯が巻かれている。

「遊星、お前良い格好をしてるな」

「天使様のお陰様でな。全治1ヶ月どころの話じゃないぜ。慰謝料でも請求しないと」

アクセラレータの皮肉にも、強気な態度で承太郎の肩を支えにして、松葉杖を振りながら遊星は返す。

頭を増やしたぐらいじゃ、この俺には勝てないけどな。

しかし・・・・・人間モドキを連れてくるとは、ちったァ頭を使えるじゃねぇか。

ハンカチで口紅を落とし、慣れない松葉杖をつき、ギブスで保護されている右足を浮かしながら遊星はアクセラレータへと数歩歩く。

表情は固くなり、瞳に強い決心が灯る。

強い風は吹き地面に生える雑草が揺れ、人間は天使を見つめ、天使は人間を睨む。

「俺は、長門を守る。全てから。これは変わらない」

「俺は、人間モドキを消す。自分の為に、これは変わらない

「・・・・・話し合いでは、解決しそうにないな」

最初から分かっていたことだ。アクセラレータも『神』直々の命令だけではなく、何か自分の重い決意がある。

だが！それは俺も同じ！大切な仲間を守る為に！

仲間との誓いが、遊星の背中を強く押す。

「天界じゃ、俺は最強の二つ名を持ってるぜ」

「それじゃあ最強の二つ名は返還してもらおうかな」

１２時間前。

アクセラレータとの戦いに無関係な人を巻き込まな為にと、黒男の家の近くにある、あまり人のこない平原に遊星たちは集まり、

「・・・・・これで全員に『天力』を移すことが出来た」

抑揚の無い声でそう告げると、遊星の頭の上に置いていた手を下げる。

天使と対等な立場に立つためにの希望。自分自身も『天力』も宿すこと。アクセラレータの絶対的能力を相手に勝つために。

「んふ、話を聞いていて思ったのですが。この『天力』は誰かの天使が使っていた『天力』が使えるようになるのですか？」

「それは違う。『天力』は自分の心によって形が変わる。私は自分に眠る『天力』をいう器を与えた」

「成程。自分のイチモツで性能が変わるんだな」

「そう。私は『天力』の器。『神』は天使の心を複製して私に宿す。そして『神』の力の影響により、自ら器を作り出し、与えることができる」

「てことは！私たちオリジナルの『天力』を使えるんだね！」

・・・・・半分、寝てた。

「遊星ｗｗｗｗ俺ｗｗｗｗ少し寝てたｗｗｗｗｗｗ」

仲間がいた。

「早速ですが、新たなこの力を試してみませんか？相手は待ってくれません」

「妖夢の言うとおりだ。力の発現させる方法は体で分かったが、自分の能力に慣れ、全員が理解しないと作戦が立てれない」

熱く鼓動を打つように。未知なる力に体を震えさせながらリオンは右手を突き出す。

僕に宿るこの力は・・・・・寒く、孤独で、

・・・・まるで僕の昔の心を表しているな。

心が僕の『天力』の名を知っている。自分の心の象徴。

「『シャルティエ』」

右手に黒い靄が集まり、靄が貼れると、銀を基調とした、細めも片刃の剣が具現化した。

「これが『天力』」

初めて『天力』を具現化させたリオンは、心に従い、力を思い浮かべると刀身に黒く、火の様に揺らめく光を纏う。

「闇だろこれｗｗｗｗｗｗ」

「だろうな。僕の心らしい能力だ」

誰もいない方へと、剣を軽く薙ぎ払うと黒い光、闇が飛んで行く。

数m闇は飛んで行き、まわりに障害物の無い空間で何にも当たらず空中で消滅した。

これは初歩的な使い方だな。もっと使い方がある。剣を介さないでも闇を使えるな。威力の方は・・・・・少し弱いかもしれない。

・・・・・なんだ？何か心の奥に残っているような・・・・

「次！ｗｗｗｗｗ俺やる！ｗｗｗｗｗ」

リオンの真似をして、笑顔を絶やさず内藤も右手を突き出す。

俺に宿る力ｗｗｗｗうはぁｗｗｗｗ何この止められない鼓動！ｗｗｗｗワクワクが止まらないｗｗｗｗ

見えてきた！ｗｗｗｗ俺様嫁を守る騎士！ｗｗｗｗｗ

世界中の全ては俺の嫁！ｗｗｗｗｗ

「『ダメナイト』」

淡い光に全身包まれ、片手では扱いづらい大きな両刃剣、全身を固める白い鎧。

「なんか手から出せそうｗｗｗｗ」

前に突き出すその手から、リオンの黒い闇とは正反対の、白い光が溢れ出す。

「最強最速の神聖ホーリー！！ｗｗｗｗｗｗ」

サッカーボール大の光の球が飛んで行き、高い音を鳴らし空中で消滅した。

「やばいｗｗｗｗｗ俺の時代が来たｗｗｗｗ」

「んふ、中々カッコイイ能力ですね、それでは次は僕が」

手をポケットに入れたまま、古泉は目を閉じる。

見えます。心の中が、投影されていく。

昔憧れていた、超能力を駆使して悪と戦うヒーローを。

僕じゃ役者不足ですけど、ヒーローを助ける仲間その１にはなれそうですね。

「『サイキック』」

何も変わらない。ただ心が覚えている。自分の覚醒した力を。夢見た、純粋な能力を。

ポケットから手を出し、手の上に火の球を作り出す。

「んふ、超能力・・・・本当に心が『天力』に投影されているんで

すね」

「それじゃ次私！」

両手を突き出し、意味不明な気合を言葉にしながら唯は吐き出す。

やっぱり！私のオリジナル能力なら私の好きなことを力にしたい！

手に入れた私の大好きなもの！楽しい友達と出会える切っ掛けとなった、

私の！

「『ギー太２号』」

お気に入りのギターと全てが同じ、自分だけのオリジナル。大切なもの。

「おぉ～」

子供の様に喜びながら、試しにギターの弦を引いてみると、音と共に風が吹き鎌鼬が現れる。

「凄い！流石ギー太２号！」

「次は私ね」

『天力』がギターなんて、唯らしいわ。

私も。頑張れる、自分が誇れる大切なもの。

強引に軽音部に引っ張り込まれたけど、歌が好きだから、出来るのなら、私は歌で助けたい。

一番心に残る、心に響く存在でありたい。心から人を救える力を。

「『ふわふわ時間』」

古泉と同じ、見た目は何も変わらないが、目覚めた力の意味を理解した。自分らしい能力。

「♪～♪～♪～♪～」

綺麗な声で、澪は何時も部活で練習している歌を歌うと、松葉杖をついていた遊星は少しずつ傷の痛みがひいていき、ギブスで保護されている足が動くようになり、遂に全身の傷が完璧に治った。

「おお！足が動くぞ！今ならサッカーで世界一目指せそうだぜ！」

「・・・・・自分の能力に驚くわ・・・」

「治癒の能力ですね。戦いの中でとても大事な能力です。それでは次は私が」

常時腰に帯刀している2本の刀の柄を掴み、妖夢は精神を研ぎ澄ます。

内藤さんの『天力』騎士みたいでした・・・きっとそれは守る力。

私はただ守られる存在じゃなくて、肩を並べて、後ろを任せられる

存在になりたい。今まで鍛錬を積み重ねた時間がそれを現実とさせてくれる。

・・・・・べ、別に内藤さんが好きとかそんなんじゃなくて！一緒に戦える仲間でありたいと！

「『楼観剣・白楼剣』」

掴んでいた刀が光、一つは常人には扱えない長い刀に、一つは常人には切れないものを切る短い刀に、

長い刀、桜観刀を軽く振ると空を切り刀身が煌めく。

「妖夢たんカッコイイｗｗｗｗ俺濡れたねｗｗｗｗｗ」

「違いますからね！勘違いしないでください！」

「・・・・・妖夢が妄想に浸かっている間に俺がやるぞ」

俺の心か。誰にも裁けない悪を裁く力が欲しい。

悪を倒すのは、それ以上の悪だ。仲間を助けれるのなら悪を俺は受け入れる。

周りにどう思われようが、俺は俺自身の正義を貫く。

「『スタープラチナ』」

もう一人の自分。力の具現化。全てをその手で裁く力。

突然全てが変わる。

「なっ！」

「どうした承太郎？自分を抑えられなくなったのか？」

「お前と一緒にするな・・・・・」

もしかしたら・・・・俺の力は・・・

「承太郎の言うとおり、そろそろ抑えられなくなってきたからイクぜ」

青いつなぎのチャックを下ろし、阿部は開放感を味わう。

迸る俺の心。止まらない衝動。漲るもう一人の俺。

大きくなる俺のココロともう一人の俺。理解した。全てを。

曝け出そう性癖を！

「『ヤマジュンパーフェクト』」

古泉や澪と同じ、見た目は何も変わっていないが、阿部は全てを理解した。それが阿倍の『天力』

空間を読み。相手を読み。全ての行動を理解する力。

「これで俺はノンケの弱点を読めるな」

「うはぁｗｗｗｗｗ誰だ阿部に凶器を持たせたのｗｗｗｗｗノンケが超危ないｗｗｗｗｗｗｗ」

遊星を除き、全員が『天力』を発動し力を見たが、遊星はこのままではアクセラレータに勝てないことを全員に隠す。

アクセラレータの恐ろしい『天力』『一方通行』

全てを反射する力。

物理攻撃しぁ反射しているのを見たことがないけど、『天力』も反射できるだろうな。

心を投影する力『天力』

俺の心は自分だけじゃない、仲間の絆と繋がっている。一人の力じゃない。天使が持たない力。

「遊星・・・・・貴方なら大丈夫・・・・」

焦る遊星の手を、長門は優しく包み込む。勇気が溢れる。絆で心が満たされていく。

仲間との絆。

これが俺の力。

「『スターダスト』」

松葉杖を放り投げ、ギブスで保護された足を地に付け遊星は右拳に

力を込める。

包帯だらけの、松葉杖をついていた男が、昨日立てなくなる程に痛めつけた相手が、

自分へと殴り掛かってくる。

驚いたぜ、どんなマジックを使った知らないが反射の前には無力！

傷だらけの遊星の行動に、不意を突かれたアクセラレータは避けることはせず、反射で対処しようとするが、

それが間違いだった。

「ヴィクテム・サンクチュアリ！」

奇妙な感覚が起きた。最強と呼ばれる所以『一方通行』からなる最強の盾であり武器でもある『天力』が、

吸収された。

「何ッ！」

泣いていた。仲間が、苦しんでいた、一人で。

全て絆でふきとばそう、仲間を守ろう。俺の拳が全てを打ち砕く。

「まずは一発目！」

上から下へと振り落とす様に、右頬に鈍い音を響かせながら遊星の

右拳が決まり、細いアクセラレータの体は軽々と後ろへ吹き飛んでいく。

今まで誰も反射の先へ到達したものはいない。天使も悪魔も。

その先へたどり着いたのは、心に絆を秘めた少年の拳。自分の為では無く、誰かの為に振り上げた拳が最強に傷をつけた。

第１４話　最強の理由

最強の俺が！人間如きに殴られるだと！

殴られ、口の中が切れ鉄の味が広がり、アクセラレータは血を吐き出し何が起きたのか整理する。

遊星の傷が治っている理由は分からない。もしかしたら治ってなくて、我慢してるのかもしれない。だが、俺の反射の膜が遊星の拳に吸われていくの感じで分かった。

『天力』を手にしやがったな。

「決まった！！ｗｗｗｗ遊星選手の右ストレートだ！！ｗｗｗｗｗ」

「んふ、あの一撃は足にきますよ」

「キャー！遊星君カッコイイー！」

「・・・・・・遊星カッコイー」

「お前たち・・・・馬鹿やってないで天使が立ち上がるぞ」

ゆっくりと自分を戒める様に拳を強く握り、巻かれていた包帯を剥がしていく遊星をアクセラレータは敵とし、相手の『天力』が何か考える。

俺の反射を吸収した。もしかしたら遊星の能力は『天力』を吸収す

る能力かもしれない。どうして吸収に対して反射が発動しなかったのか分からない。

状況を理解しろ。遊星の能力は未知数だが、あの9人の内、1人の能力は回復系統だってこと、他は不明。

遊星たちの能力を知るのに利用できるものは・・・・

反射を使い後ろへと大きく跳び、大きく聳える木に触り、遊星たちへと反射させる。

破壊音と共に向かってくる木に、妖夢は『楼観剣・白楼剣』を発動し、長い刀、『桜観剣』を漆黒の鞘から抜き、白銀の刀身を露にする。

「はあぁ！」

柄を両手で力強く握り、『桜観剣』を頭より上に上げ向かってくる木へと振り落とす。

乾いた音が響き、空中で木が二つに解れ地面に落ち、妖夢は『桜観剣』をアクセラレータへと向け、

「なんど木を放っても同じことですよ」

あのおかっぱ頭の女の『天力』は武器系統・・・・億足だが、きっと普通の刀より切れ味が良いだけ。問題は腰に帯刀しているもう1振りの刀。

「んふ、余所見しないでくださいよ」

古泉が両手の平に火の球を浮かばせ、アクセラレータへと火の珠を放つ。

防ぐ動作もせず、そのままゆっくりと遊星たちの方へと歩を進め、邪魔をする火の球を反射の膜が跳ね返す。

空気を焼きながら反射される火の珠を、リオンの『シャルティエ』から放たれる闇の斬撃と衝突し消滅する。

すかした面をした奴の『天力』は超能力系統、白銀の片刃の剣を持つ奴の能力は武器系統。闇属性だな。

「阿部、長門を頼むぞ！俺がアクセラレータの反射の膜を吸収した瞬間を狙え！」

確信は無かった。もしかしたら『ヴィクテム・サンクチュアリ』を反射するんじゃないかと思った。

結果は最強の壁を取り払うことが出来たけど、反射を吸収してもすぐに再生するから厄介だな。

今度は吸収に全ての力を回そう。大丈夫だ。最強の天使と対等に戦えている！

「らあああぁぁ！」

遊星は『ヴィクテム・サンクチュアリ』を発動した右拳をアクセラレータへと振るうが、一つも当たらない。遊星自身にアクセラレータへの恐れはない。

アクセラレータが遊星の能力の謎に恐れ、『天力』と意識を全て回避に集中する。

最強が恐るのは可笑しいのか。違う。恐れを知らないものは最強にはなれない。

「タッチ！」

相手を殴るわけでもなく、アクセラレータの肩を右手で掴み『ヴィクテム・サンクチュアリ』を発動し続ける。

体に纏う膜が全て消えた。

『ヴィクテム・サンクチュアリ』これは系統に分けれない。だが謎は少し解けたな。

能力は右手しか発動出来ない。『天力』を吸収し続ける。

嫌な能力だ。

「死んでも触り続けろよ！『スタープラチナ』」

もう一人の自分を具現化させ、承太郎はもう一人の自分に意識の中でアクセラレータを殴ることを命令し、その通りに豪腕が振るわれ、アクセラレータの腹へと命中する。

「がぁぁ！」

身体がくの字に曲り、アクセラレータは掠れる悲鳴を鳴らしながら

遠くへ飛んでいく。

なんて馬鹿力だ！体中の骨が砕けるかと思ったぞ！だが、これで長身の男の能力が分かった。超能力系統。

「そのまま追撃いくよ！『ギー太２号』」

『ギー太２号』を振り回す様に唯は鳴らし、弦から放たれる鎌鼬が倒れているアクセラレータへと放つ。

武器系統の『天力』風を操るのか？

手を前へと翳し、アクセラレータは吸収されていた反射の膜を再び纏い鎌鼬を撥ねかえす。

右手が俺に触れていない限り『天力』は使える。

「・・・・・理解した。あいつの何処を攻めれば逝くのか！」

「やっぱり阿部は今回は戦わなくていいぞ！」

「そうだぜｗｗｗｗ混沌に包まれたウホッ♂空間なんて見たくないからなｗｗｗｗｗ」

青いつなぎの男の言葉が凄く気になるな。あいつらも何故か慌てているし、まあ武器系統を発動していないのを見て、あの男の『天力』は超能力系統。遊星みたいなイレギュラーな能力では無い。

金髪の纏っているあの大層な鎧は武器系統の『天力』、それじゃあまだ何もしていない黒髪の女の能力が回復系統。

・・・・・はぁ

「所詮、その程度か」

人間が『天力』を持つこと。常識を外れた存在を俺が一番恐れていた。

まぁ、どれも俺を超える力では無い。

「お前らの『天力』を知るためによォ、力をセーブして使ってやったのに・・・・・残念だ」

確かに残念だったけど、分かったことがある。

「三下は、永遠に三下だァ」

今までいた場所から、アクセラレータは消えた。

反射を利用した異常な一歩で、数m先にいた内藤の目の前に一瞬で到達し、反射を纏う手が内藤の頭に触れる。

反射の力の前に、紙人形の様に内藤は吹き飛び、地面に体を強く当てそのまま動かなくなった。

「内藤さん！」

ピクリとも動かなくなった内藤の元へと、顔を青くしながら妖夢は駆けつけ抱き上げる。

戦慄。これ以上ない恐怖。
アクセラレータの恐怖は、心の底から相手を恐れるのではなく、分からないことを恐れる。
今遊星達が感じている恐怖は、
「澪！早く内藤を回復しろ！」
「くっ・・・・・！」
凍りついた空間を切り裂いたのは、仲間をとても大事にする遊星の心と、全てを冷静に見ることが出来る承太郎の精神。
まさかベクトル操作があそこまで恐ろしい能力だとは・・・・・俺が出来る限り前に出ないと！
「もうお前を俺に触らせない。地べたに這い蹲れ三下ァ」
アクセラレータは、片手をジーンズのポケットに入れていた数十本の釘を取り出し、それを遊星に向ける。
やば！あいつなんて鬼畜な技を！
「穴だらけにしてやるよ！」
手の平か反射され、遊星へと真っ直ぐに先の尖った釘が飛んでいく。
「ヴィクテム・サンクチュアリ！」

飛んでくる釘に右手を振るうと、勢い良く飛んできた釘を軽々と払い除け残っていた釘が体を貫く。

「がぁぁ！」

今のはなんだ？遊星の能力は『天力』を吸収する能力じゃないのか？物理攻撃すら吸収するのなら、

あの手はまさしく無敵。

体に突き刺さる釘の痛みが体中を走り、流れる血と熱い鈍痛に耐えながら遊星はアクセラレータへと右手を突き出す。

真正面からあの手と戦うのは馬鹿のすることだな。

地面を反射させ逃げるように後ろへと跳び遊星から距離を取り、アクセラレータはまた九義を取り出し、

「少しお前の能力を甘く見てた！でもこれは防げ無いぜ！」

両手に溢れるほどと釘を遊星へと向け、手の平から反射させる。

空間を埋め尽くする釘の固まり。

やばい！防ぎきれ無い！

「ギュイィィン！」

唯の『ギー太2号』を弾く音と共に体が吹き飛びそうになる程の暴

風が吹き荒れ、遊星の目の前まで近づいていた釘の塊が全て吹き飛び地面に落ちていく。

「へいリーダー！1人でカッコつけないで皆で協力しないと！」

「唯の言うとおり、長門を皆と助けるんじゃなかったのか？」

遊星に悪態をつきながらリオンはシャルティエを地面に突き刺し、意識を全てを刀身に捧げる。

孤独を操れ。自分の負を力にしろ。

シャルティエの刀身から闇が溢れ出しアクセラレータの周りを囲み、やがてドーム状となりアクセラレータを閉じ込めた。

『天力』を手に入れて1日も経って無いのに、素人にしては上手に使えてるなァ。

自分の視界全てを黒く塗り潰す闇に向かって反射の膜を纏った拳を振るい、闇を跳ね返し消滅させる。

最強の名は、自分が名乗るのではなく周りが呼ぶ。

アクセラレータの『天力』『一方通行』は全てから恐れられる、最強と呼ばれるのに相応しい絶対能力。

「遊星君、怪我大丈夫？」

「あぁ、流石澪の『ふわふわ時間』だな。周りに居るだけで治したい相手に歌を聞かせて怪我を治す。澪がいなかったら勝負にならな

かったな」

「僕の闇が簡単に破壊された・・・・内藤の方も蘇ったし、そろそろあの作戦を始めた方がいいな」

「んふ、この作戦は承太郎君と遊星君が頼りなんですから頑張ってくださいね」

「長門を守ってるから、お前らは後ろの穴を気にせず戦え」

「完全wwwwww復活wwwwww俺最強wwwwwww」

「そんなことを言ってるからやられるんですよ」

「おや〜妖夢〜涙浮かべながら倒れている内藤君を抱きかかえてたのに〜」

「・・・・・・これはツンデレと認識した」

「お前らな・・・・少しは緊張感を持て」

最強を名乗るだけはあるな。戦っている間に心がボッキリ折れそうになったぜ。

でも、

俺たちには絆がある。最強をも超える力を。

「いくぞ！作戦星屑(スターダスト)の煌めき(プラチナ)！」

第１５話　星屑の煌　（前書き）

原作と能力がオリジナルになっていますが、そこはスルーでお願いしますｏｒｚ

初コメがとても嬉しくて一人盆踊りしてました

第１５話　星屑の煌

時は戻り。アクセラレータと戦う為に各々『天力』の鍛錬を積んでいると、承太郎は自分の最大の能力に気付いた。

「お前ら、俺の『天力』には一つ面白い力があるぜ」

自分の『天力』『スターダスト』の能力である吸収を試す為に、古泉の炎の球を受け止めていた遊星は、承太郎の一言に、

「もう一つの力？なんだよそれ？」

「今それを見せてやるよ」

「スターダストプラチナだァ？」

阿部と澪、長門を守る様に、前から内藤、妖夢と古泉、リオン、澪が、その後ろに遊星と承太郎が陣形を整える。

しょぼい目くらましで時間稼ぎ、それで出来たのが長門を守る様な陣形。

俺をなめてるとしか思えないな。これが人間の限界かよ、俺に絆で勝つとか大口叩いて、

「１０秒で全員地面にキスさせてやるよ！三下共がァ！」

ベクトル操作による異常なダッシュにより、風を切りながら内藤の死角から反射の膜を纏った手を伸ばす。

もう一度反射の味をたっぷりと味わいやがれ！

あの時、内藤さんを守れずに怪我を負わせてしまった。近くに私が居たのに。誰かを助ける為に鍛錬を積んできた刀が届かなかった。

だけど！私は刀を力の限り伸ばそう！守りたい人がいるから！

「『白桜剣』」

腰に帯刀してあるもう一本の小刀、『白桜剣』を迷わずに反射の膜を恐れず妖夢は振るう。

素早く振るわれる刀に気付けなったがアクセラレータは自分の最強の力を信じ、自分を傷つけることはないと心の中で笑う。

確かにアクセラレータを斬ることは出来なかった。

「なっ！」

「今です！内藤さん！」

人を斬るのは『桜観剣』

『白桜剣』は、人以外全てを斬る。

反射の膜を切り裂き、伸ばしていた手の反射の膜が霧散した瞬間を狙い内藤は大きな両刃剣を振るう。

狙われているのが反射の膜に覆われていない手だと気付き、アクセ

ラレータは後ろへと跳びそれを避ける。

馬鹿なァ！俺の反射が切られただとォ！

遊星の能力だけじゃなく、あのオカッパ頭の女まで俺の反射の壁を超えるとは・・・・・

超える？本当にそうか？

斬られた瞬間。遊星の能力には反応しなかったが、確かに反射の膜は俺への有害に反応し、反射したはずだ。

あの小刀の能力はきっと『天力』を斬る能力。アンチ『天力』

・・・・・理解しがたいが、

「反射されながらも斬ったのか」

反射の膜へと放たれた力と反応して跳ね返す。今まで無かったが、あの刀の能力はそれを可能にした。

その代償は大きい。

「はぁ・・・・・はぁ・・・・・・・」

腕が動かない・・・・全身に痛みが・・・・・・

掴んでいた『白桜刀』が手から零れ落ち、妖夢はその場で蹲ってしまった。

「驚いたぜェ、本当にお前には驚かされればっかりだなァおい。オカッパ頭。お前の能力は最強の俺にとって脅威だ」

激痛に耐えながらも近づいてくるアクセラレータを睨み、体中が張り裂けそうになる程の痛みで震える手で『白桜剣』拾う。

この身が朽ち様とも・・・・・

「俺様の被害者第1号だ」

自分へと近づいてくる、一撃必殺の手。

早くも脱落ですか。皆さん、後は任せました・・・・・・

「俺の嫁にwwww手出しさせないwwwwwwwww」

妖夢へと伸びていく反射の手へと内藤は飛びつき、全身に身が飛び散る様な痛みが走る。

反射をされながらも、内藤はアクセラレータの腕を離さない。

「内藤！その手を早く離せ！」

右手に力を込め、遊星が内藤を助けに行こうとするがそれを承太郎が止め、蹲っている妖夢と自分を顧みずに、アクセラレータの腕を掴んでいる内藤を目を指す。

・・・・そうだ、俺の安易な行動で折角二人が自分を犠牲にしてまで俺達に思いを託してくれでいるんだ。

「離しやがれ！」

掴まれていない手で内藤の顔へとアクセラレータは拳を振るい、人形の様に吹き飛び内藤は動かなくなった。

先に金髪を倒しちまったけど、これで実質2人倒せたな。

どんな小細工も最強の俺には通用しない。

「内・・・・・・藤・・・・・さ・・・・・」

意識が遠のき、目の前の視界が白くなり、自分を助けてくれた相手を見えない目で追い妖夢はそのまま意識を失った。

「安心しろ遊星。澪が今歌って傷を治してくれている。僕たちは今自分のやるべきことをしなくてはいけない。例え、仲間が倒れようとも」

リオンの言葉が、遊星へと重く圧し掛かる。分かっていたことだ。

スターダストプラチナは仲間の犠牲によって成り立つ作戦。

皆！必ずアクセラレータを倒すからな！

「んふ、それではお次は僕たちですよ」

「よし！ここは一発逆転を狙おうよ！」

「相手が自分より強大だからと簡単に僕は諦めない」

妖夢と内藤を無傷で倒したアクセラレータへとリオンは駆け出し、古泉は両手の平に火の球を作り、唯は『ギー太2号』を構える。

仲間の為に、全てを守る為に僕は犠牲を払おう。その変わり必ず救う。後ろに仲間が倒れていても。

「『シャルティエ』」

強い思いを胸にリオンは、白銀の剣『シャルティエ』を地面に突き刺し、もう一度アクセラレータを闇で包み込む。

同じ芸を2度見せるなんて、三下のすることだ。こんな固まり俺が触れるだけで消し去るのにょォ。

アクセラレータは自分を遮る闇へと反射の膜を纏った手で触れ、闇を消し去るが、

目の前に、自分を包んでいたドーム状の闇が十数個現れ、遊星たち全員居なくなっていた。

「けッ・・・今度は隠れんぼか？」

相手を包み込み行動を遮るだけでなく、自分が隠れる場所を闇で作り上げた。

根暗な能力にお似合いな芸当だな。全部破壊して見つけてやるよ三下共。

近くにあるドーム状の闇を殴ると簡単に消え去る。脆い隠れば。最初はそう思ったが、

7個目を破壊したころからアクセラレータはあることに気づいた。
増えてないか・・・・・
最初は十数個しかなかったドーム状の闇が、気づけば二十を軽々と超え辺り一面闇に覆われていた。
「それにしても、小声で歌っても効果があるんだな」
「相手に歌声が聞こえていれば『ふわふわ時間』は発動するんだろ」
息を潜め、小声で遊星がそう言うと、『天力』を解除し来るべき時の為に精神を落ち着かせようとしている承太郎が答える。
暗い闇の中で古泉の火の珠を灯りの代わりにし、澪は歌声を聞かせ今だ意識が戻らない内藤と妖夢の回復させ、唯は火の珠に手を当て遊び、長門を守る様に阿部は『ヤマジュン・パーフェクト』を発動し辺を理解し、意識を向ける。
「天使の奴、偽物ばかり突いて性欲が消化不良だろうな」
「長門・・・・あれの方だどうだ・・・？そろそろ僕は限界なんだが・・・・・」
「５２％・・・・・全然足りていない」
「このままじゃリオンも倒れちまう。承太郎、そろそろ実行するぞ」
あれの方が駄目なら、妖夢が打ってくれた楔の効果がそろそろ現れる頃だ。心を決めて立ち向かわないと！

右手に宿る絆の力を信じ、遊星は承太郎の肩を触る。

何も言わず承太郎はただ頷き、『スタープラチナ』を発動し、阿倍の合図を待つ。

阿部の『天力』『ヤマジュン・パーフェクト』は、全てを理解する、空間、相手を読む。それは今遊星たちを探しているアクセラレータの居場所が見えていなくても理解できる。

アクセラレータは遊星たちが何処に居るか分からない。だが、遊星たちはアクセラレータが何処に居るか分かる。

息を潜め、ダミーの闇を破壊していくアクセラレータの居場所を理解し続け、その時を待つ。

リオンは『天力』を消費し息が荒くなり、体の力が少しづつ抜けていく。

増え続けるダミーの数が少なくなっていき、遊星たちは焦りを覚える。

外から聞こえる天使の声が大きくなり、等々ドーム状の闇が6個を切ったその瞬間、

アクセラレータが纏っていた反射の膜が消えた。

『天力』を切り裂く『白桜剣』の本当の力、それは相手の『天力』を一時的に発動を阻害する能力。

発動するまでに少し時間がかかるが

相手の変化を瞬時に理解し、阿部は声を上げ遊星と承太郎に合図を送り、リオンが全てのドーム状の闇を消す。

反射の膜が消えたアクセラレータへと、リオンは地面から『シャルティエ』を抜き、刀身に宿る闇を放つ。

体を逸らし直撃は避けることができたが、肩に闇が当たり後ろへと仰け反る。どうして能力が発動しないのか、痛みを感じる間も無く頭の中で色々なことが浮かび上がるが、

「遊星アアアアアァァ！！」

自分に起きた異変よりも先に、隠れていた相手が自分へと向かってくることを優先し、アクセラレータは気力から無理矢理消えていた反射の膜を再び構築し、遊星へと最強の手を向ける。

「『スタープラチナ・ザ・ワールド』」

『スタープラチナ』の卓越したスピードが『時を超え』世界はその動きを止めた。

時の静止した世界を動くことが許された、まさに全てを裁く王の力。

その中、『ヴィクテム・サンクチュアリ』の吸収する能力により、自分の時の静止を吸収し遊星は承太郎と同じ、止まった時の中を動く。

灰色の世界を駆け抜け、遊星はアクセラレータの後ろへと回り込み、

止まった時が5秒経過し、

時が動き出す。

この瞬間を作り出す為に、遊星たちは自分の力を小出ししながらアクセラレータを油断させ、仲間が倒れようとも、この右拳が再び届く範囲へと届くために、

「『ヴィクテム・サンクチュアリ』」

遊星の拳が、何故自分の後ろに完膚なきまで破壊しようとした相手が居るのか理解できないアクセラレータの腹へと届く。

反射の膜を吸収し、無防備になった体へと届き、重い痛みが体を巡り、息が出来なくなる。

アクセラレータは殴られた勢いを利用し、後ろへと大きく跳び逃げようとするが、

「『シューティング・ソニック』」

今まで吸収し溜めていた反射の膜を放出し、地面へと触れ、反射を利用しもう一度アクセラレータの目の前に現れる。

まさか俺の『天力』を使うとは！だが、何故か使えなくなっていた能力も落ち着いてきた、冷静に全てを対処しろ。今は兎に角遊星から距離を離さないと・・・・

また、目の前から遊星が消えた・・・・・・

全ての行動が追いつかないアクセラレータは反射的に後ろを振り返るが、眼前に拳が近づいてくるのが見え、右頬に激痛を感じ、地面に倒れる。

突然能力が発動できなくなったり、相手が目の前から消えたりと、普通じゃない状況に置かれ、アクセラレータは冷静に判断することが出来なくなっていた。

「んふ、それでは僕も参戦させて貰いますよ」

「私も！あまり活躍できてないんだからここはバッチリ決めるよ！」

古泉は両手に作り出した火の球をアクセラレータへと投げ、唯は『ギー太』を勢い良く弾き鎌鼬を起こす。

また時が止まり、灰色の世界を遊星は駆ける。

承太郎が間隔を短く、連続で時を止められるのは3回。これで最後。

倒れているアクセラレータを持ち上げ、古泉と唯の方へと向け、

時が動き出す。

また気が付けば自分は遊星に抑えられ、目の前に火の珠と鋭い風の塊が近づいている。

遊星が反射の膜を延々吸収し、アクセラレータは自分を守るものは無く、無防備な体で全てを受け、紅い炎が体を焦がし、鋭い風の塊が身を切り裂く。

思考が何も決断しない。俺はこの状況が理解できない。気づけば何故か遊星に先手を取られ、今、俺は、

確実に人間に負けている。

「これで！最後オオオオオオォォォォ！！」

仲間で作り上げた希望、仲間で掴み取った最後の一撃。

拳を唸らせ、最後の一撃に全ての力を込める。１人ではない。仲間で手にした勝利。

遊星の目の前には、勝利が見えていた。

だが、最強は、遊星たちが作り上げた希望を打ち砕く。

目の前が真っ白な光に包まれ、一瞬、全身に耐え難い痛みがを味わい、そして暗い意識の底に遊星は潰えた。

第１６話　遊星へと繋ぐ希望

「くかきけこかかきくけききこかかきくこくけけけこきくかくけけこかくけきかこけききくくくきかきくこくけくかきくこけくけくきくきくきこきかかか！！」

キズだらけの体で天を仰ぎ、天使は悪魔の如く理解出来ない咆哮を上げ、唯の『ギー太２号』から放たれる風とは比べ物にならない程の暴風が吹き荒れ、遊星へと鉄をぶつけたような痛みと感覚と感じ、意識を刈り取られた。

遊星たちの絆は確実に天使を追い詰めていた。勝利が、仲間も救うことがあと一歩で歩めると、遊星の拳がアクセラレータの反射の膜を超えたはずなのに、

結果は、絆を武器に戦った遊星は最強の壁の前に倒れ、白い天使が立ち尽くす。

「ハァ・・・・ハァ・・・・・・くき・・・かく・・・・・・」

土壇場でまさか『一方通行』の新しい使い方を見つけれるとはな・・・・俺の能力はただ反射するだけじゃない、大気に触れ、風全体を操作すし暴風を作り上げた・・・・だが、大気を操作するのに力を大量に消費して、もう一度発動することができない。

まァ、遊星を倒せば俺が勝ったも当然だがな。

「チッ・・・まさかあんな奥の手を持ってるとはな・・・・万策尽きたか」

アクセラレータの最強の壁への切り札であった遊星が倒れ、反射の膜を唯一切り裂くことが出来る妖夢と内藤は今だ目覚め無い。圧倒的不利な状況。

天使は、人間の全てを超えた。

自分自身。連続で時を止め、一時的に『スタープラチナザ・ワールド』使え無いこの状況の中、口では諦めを示唆するが、承太郎はいつもの溜息を吐き、帽子を被り直し『スタープラチナ』アクセラレータへと向ける。

「それじゃあ白旗でも上げて諦めるの？」

「んふ、まさか。澪さん。遊星君たちの治療頼みますよ」

『神』の力を恐れ、長門にアクセラレータは手を出せないが、実際は、自分を人間の体に構築した為に自分を防衛するための攻撃を目的とした能力を無意識下でも発動することができない。

その為、もしアクセラレータがそのことに気づかれた時を想定して、相手の全てを理解し先手を取れる阿部が長門を護衛しなければならず、確実に不意打ち決めるためにリオンは力を使い果たし、遊星たちの治療のため動けない澪。

今戦うことができるのは、時を止めれない承太郎と、唯、そして古泉だけ。

「三下ァ。俺はよォそこの人間モドキの力を頼りに戦うのかと最初は思ったぜ。『神』は無意識でなら『神』の力を使えって言ったか

らよォ。でも・・・・・」

その先は、この圧倒的不利なこの状況悪化させる言葉。

全員心の奥で天使を恐れているはず。なら・・・・・反射を恐れず俺が先手を取らないとな。

この戦いは、長門を助ける為に天使がもう俺たちとを攻撃したくないと思わせる程の圧倒的勝利を目指さなくてはならない。

半端な反撃だともっと天使を引き連れて長門を奪いにくるだろう。

その為の『スターダストプラチナ』二段構えの作戦。

1つ目は成功しなかったがまだ俺たちには2つ目の作戦がある。その為にも遊星が、再び輝きを取り戻し立ち上がるのを信じて時間稼ぎをしなければならない。

それが、どれだけ無謀なことだとしても。今誰かが遊星の変わりに前に立ち、天使へと拳を振ることが必要だ。

「オラアアアァァ！」

承太郎の『天力』『スタープラチナ』の豪腕がアクセラレータの反射の膜に触れ、

反射の膜へと与えられた力が跳ね返り、その衝撃が『スタープラチナ』の腕に走る。

『スタープラチナ』が傷つけば、俺も同じ場所を傷つく。まさか反射の一撃がこんなに辛いものだとは・・・・・

だが、俺は諦めない。腕の1つや2つ、俺の心まで砕くことは出来ない！

「いっけええええぇ！」

「ふんもっふ！」

唯は激しく『ギー太2号』の弦を弾き、鎌鼬を、古泉は両手に火の珠を作りアクセラレータへと放つ。

この状況では意味の無いことだとは承太郎たちは分かっている。この行動が、この先の勝利へと繋がるのを信じて最強に挑む。

「三下ァ共が！蝿の様に俺の周りを飛ぶな！」

全てを平等に反射し、何人たりともその奥を超え到達することを許さない。最強の壁。

『スタープラチナ』の豪腕も『ギー太2号』の鎌鼬も『サイキック』の火の珠も、

何が絆の力だァ！何が絆でふきとばすだァ！口では何でも言える！ただ反吐が出るような甘ったるい言葉を並べても力がなければ悪に勝つことはできない。

正義を振りかざすことを許されない俺に勝てない奴が！

「アアアアアアァァ！！」

反射の膜の前に全てが跳ね返され、そして何もでき無い、勝つことなど到底無理だと感じさせられる。

それでも承太郎たち3人は地面に手を付き、最強の力に倒れようともその度に立ち上がりアクセラレータに挑む。

自分へと向かってくる鎌鼬を、軽々と反射の膜を纏った手で弾くが、アクセラレータは異変に気づき始めた。

「私ね、皆を癒してあげることしか出来ないからさ・・・・私の分も唯。頑張ってね」

「ギュイイィィ！1人じゃない！2人分の風だよ！」

「俺は長門を守らなくちゃいけないからな、俺の分も溜めないで発散してきてくれ」

「んふ、僕らの熱いパトスが燃えてますよ」

倒れ、そして立ち上がる度に承太郎たちの心に炎も燃え上がり、『天力』の威力が上がり始めている。

1人じゃない、2人分の力。

たった2、3日の繋がりの人間もどきの為にどうしてここまでやれる？人間もどきの存在が自分たちの脅威となるのにょォ。

どれだけ立ち上がろうとも俺に傷一つ付けれない奴らが・・・・・・

「承太郎。あの時お前が怒ってくれたからさ、俺はきっとアクセラ

レータにも恐ることなく戦える。あいつにあって俺たちにあるもの」
「絆の力！仲間の力が俺たちを強くする！何度倒れようとも再び立ち上がる勇気をくれる！」
「何が仲間の力だ！三下共が弱いから集まることしかできないからだろォ！本当のヒーローは孤独でも強いんだよォ！！」
ベクトル操作を使った瞬間移動により古泉と唯を薙ぎ払い、アクセラレータは承太郎へと反射の膜を纏った一撃必殺の拳を放つ。
ダメージが蓄積し、承太郎の足が一瞬動かなくなった。
その一瞬が勝敗を分ける。アクセラレータの拳が完全意承太郎を捉え、避けることは出来ない。
はぁ・・・・・ここでリタイアか・・・・・・・
仲間の勝利を信じ、目を閉じようとした承太郎の目の前に、
「うはｗｗｗｗ承太郎何諦めてるしｗｗｗｗｗｗｗｗ」
「とても素晴らしい言葉を恥ずかしがらずに大声で叫んでいたのに、仲間の私たちを信じてないのですか？」
『天力』を切り裂く『白桜刀』を手に承太郎とアクセラレータの間に入り、妖夢は小刀を振るいアクセラレータを牽制し、両刃剣を振り回しながら笑う内藤が現れた。
「怪我人全員の傷を治療したよ。まだ遊星君は倒れているけど、後

は気力しだい、これで皆の治療に専念できる」

「流石澪！私たちに出来ないことを平然とやってのける！」

「そこにシビれるｗｗｗｗ憧れるｗｗｗｗ」

「完全に僕出遅れたな・・・・・・」

遊星・・・・・早く目を覚ませよ。

仲間の為に、全員が倒れても何ども立ち上がってお前に繋げよとしてるんだからな。

天使、しかも最強の二つ名持つ相手に戦えるのは、

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4473v/

絆でなんでもふきとばせ

2011年10月5日14時44分発行